Ⅰ　全体研究主題

「児童生徒一人一人にとっての自立を目指した授業（指導や支援）をつくる」

～キャリア教育の視点を取り入れた授業の充実を目指す～

Ⅱ　研究主題設定の理由

平成２１年度まで本校では、「地域で豊かに生きるための支援はどうあればよいか」という全校テーマを掲げ、３年次にわたって研究を行った。その中で、本校の児童生徒が地域で豊かに生きるためにつけたい力・補助的な手段の活用・環境設定の在り方について示唆を得ることができた。しかし、課題として普段の実践（授業・効果的な支援ツールの検討・職員間の共通理解・小中高の連携）にどのように活用していくかという課題も挙げられた。

本校の児童生徒の実態は、重度重複化傾向にあるとともに、一方で軽度の発達障がいなどの児童生徒も増加してきている。そのため、進路希望も多様化しているとともに、近年の社会情勢もあり、必ずしも希望通りの進路に進むことができるわけではない。多くの児童生徒が卒業後に、仕事・生活・余暇の面で、課題を抱えている実態もある。このような児童生徒に対し、学校段階において、年齢や発達段階に応じて、将来の豊かな生き方につながる指導の必要性が高まってきている。

一方でキャリア教育の重要性も年々高まってきている。文部科学省においては、キャリア教育を「児童生徒一人一人の勤労観・職業観を育成し、職業生活を通じてどう生きるかを考えさせる教育である」と定義している。そのため、それぞれの年齢や発達段階に応じたキャリア教育が求められてきている。

教員の最大の専門性といっても過言ではない授業力向上について、平成２１年度学校教育指導指針によると、校内研究について、教員が主体的に参画できる授業研究会を企画し、教員一人一人の授業力の向上につとめる」と挙げられている。その具体例として、小グループでの協議等を取り入れたワークショップ方式の導入など全員で意見交換ができる授業研究会が効果的である、と示されている。

そこで、本研究では、キャリア教育の視点を取り入れた授業実践を積み重ねる中で、目標・内容・支援の設定と、授業改善について、ワークショップ型の授業研究会の実践や、略案の様式を検討する中で探っていく。また、これらの実践の中から、各学部のキャリア教育の在り方についても検討していく。

Ⅲ　研究の目的

１　児童生徒一人一人のより良い自立を目指し、キャリア教育の視点を授業（指導）の目標や内容、支援に生かす。

２　効果的な授業（事例）研究会を目指し、児童生徒のより良い成長を促す授業（指導）の改善や教職員の授業（指導）力向上を図る。

３　キャリア教育の視点を取り入れた授業実践を積み重ね、各学部のキャリア教育の在り方を明らかにする。

Ⅳ　研究の内容と方法

１　キャリア教育の視点を取り入れた、授業目標・内容・支援方法などを設定する。

２　効果的な授業（事例）研究会として、ワークショップ型授業研究会やインシデントプロセス法を取り入れた事例研究を運営し、それを授業（指導）改善に活用するよう取り組んでいく（改善システム・略案様式等）。

３　各学部において、キャリア教育の視点を取り入れた授業実践や研究会、キャリア教育への取り組み方について検討を積み重ねる。

Ⅴ　研究計画

月	研究内容（１年次）	月	研究内容（２年次）
4	全体研究計画提案（4/27）	4	全体研究会①（4/28）　各学部研究実践 「２年次の取り組み」
5	全体研究会①　各学部研究実践 主題の決定と研究計画	5	
6	校内研修（キャリア教育）	6	
7	校内研修（授業研究）	7	全校授業研究会（中）
8		8	
9		9	全校授業研究会（小）
10		10	全校授業研究会（高）
11		11	
12		12	全体研究会② 最終報告
1		1	研究集録製作
2	全体研究会② 中間報告「１年次のまとめ」	2	
3		3	研究集録（CD と HP）

※　毎月の学部研究と、全体での授業研究会を年３回実施する（各学部１回ずつ）。

Ⅵ　研究の実践

小学部

１　主題

「児童一人一人の将来像を想定した授業をつくる」

～キャリア教育の視点を取り入れた授業改善～

２　研究主題設定の理由

本校小学部では平成 21 年度まで「小学部段階における地域で豊かに生きるための支援の在り方」について交流学習の場を利用した取り組みを行ってきた。その結果、交流教育を通して本校児童が地域で豊かに生きるための力をつけつつあることが検証された。しかし、課題として普段の授業において児童一人一人に育てたい力を学習内容に位置づけていく必要性が挙げられた。また、本校児童生徒の現状から卒業後の豊かな生活を見通した支援の必要性が高まってきている。そのため小学部から発達段階に応じて児童の将来像を想定したより良い授業を行っていく必要があるといえる。

しかし、本校小学部における授業づくりの現状と課題について小学部職員の意見を集約すると、異なる実態の集団による効果的な授業の在り方や TT の連携の在り方、児童の実態の共通理解を図る場の必要性など様々な課題が挙げられた。また、小学部段階において児童の将来像を想定することが難しい、集団内の実態の差が大きく授業において個別のねらいを盛り込むことが困難といった課題も挙げられた。

本研究では、授業研究会においてキャリア教育の視点を取り入れた授業実践・改善を積み重ねる。そこで、小学部段階におけるキャリア教育の視点を取り入れた授業の在り方、ねらいについて検討する。このことにより、児童の将来像を想定した授業内容・方法・目標を設定でき、普段の授業をよりいっそう充実させ発展させることができると考える。さらに、授業研究会において、授業における課題を解決する場・児童の共通理解を深める場を設定し、小学部職員の授業力向上を図ることとする。

３　研究の目的

（１）　より良い授業づくりを目指し、児童の豊かで幸せな将来像を想定した授業内容・目標・支援方法を設定する。そのために、キャリア教育の視点で授業を捉え直す。また、それらを授業の目標や内容、支援に生かす。

（２）　授業研究会を通して、児童のより良い成長を促す授業の在り方を検討し、教職員の授業力向上を促す。

４　研究の内容と方法

（１）月１回程度の授業研を行い、キャリア教育の視点で授業をとらえ直す。

→取り上げる授業は教科・領域を限定しない。指導案は略案(様式については別紙)とする。国立特別支援教育総合研究所作成の「キャリアプランニングマトリックス　小学部段階において育てたい力」の中から授業において育てたい力を記述する。授業研においては、ワークショップ型授業研究会を行い、目標・内容・支援方法の検討をする。さらに、キャリア教育の視点から授業の改善点などを検討する。

また、それらの授業をキャリア教育の視点を取り入れた授業の実践例としてまとめる。2 年次にはキャリア教育の視点を取り入れた授業の在り方・小学部段階におけるキャリア教育のとらえについて検討し、まとめる。

（２）文献などを用いて小学部段階のキャリア教育についての理解を深める。

→小学部段階におけるキャリア教育のとらえについて理解を深める。

それらのとらえについて学部内で共通理解を図った上で授業研を行う。

（３）効果的な授業づくりを行うために、略案様式の検討を行う。

５　研究計画

月	研究内容（１年次）	月	研究内容（２年次）
4		4	小学部２年次研究計画の検討 授業研、小学部としてのキャリア教育の視点で捉えた授業の在り方、とらえの検討
5	小学部研究計画の検討	5	
6	文献などによるキャリア教育の理解	6	
7		7	
8	授業研・略案様式検討	8	
9		9	
10		10	小学部研究のまとめ
11		11	小学部研究報告の検討
12	１年次のまとめ	12	全体研究会② 最終報告
1		1	研究集録製作
2		2	
3		3	研究集録（CD と HP）

６　研究実践

児童一人一人の将来像を想定したより良い授業をつくるための取り組み

（１）キャリア教育の視点を踏まえた授業の在り方について

ア　取り組み

児童一人一人の将来像を想定した授業を行うため以下の４点に取り組んだ。

- 児童一人一人の将来像を想定した授業を行うため、「知的障害のある児童生徒のキャリアプランニング・マトリックス（試案）」（国立特別支援教育総合研究所 2010.3）の中から授業において育てたい力を略案に記入した。（表１、資料１）
- 小学部研において、ワークショップ型研究会を行った。授業研究会では、授業者が検討を希望する事項とキャリア教育の視点にかかわる事項を協議の柱とし、目標、内容、支援方法などについて検討した。（表 2～表 7）
- 授業研究会後にアンケートにて、キャリア教育の視点を踏まえた授業の在り方について小学部職員の意見を集約した。
- １月学部研において、キャリア教育の視点を踏まえた授業の成果と課題、改善策について小学部職員で検討した。

表１　各授業におけるキャリア教育の視点

	学年	授業名	キャリア教育の視点
7 月	よつば 2 組	休日の様子を発表しよう 繰り上がりのある足し算をしよう	・ 意思表現(休日の出来事を相手にわかるよう発表できる) ・ 振り返り(休日の出来事を正確に振り返り、今後の判

			断材料にする) ・ 金銭の扱い(足し算や引き算の概念が分かる　Y)
8 月	2、3 年	音楽	・ 選択(自分のやりたい楽器を選択する) ・ 集団参加(友達や教師と手をつなぐ。みんなと一緒に活動する)
9 月	4 年	図画工作　みんなの思い出を描こう	・ 集団参加(大人や友達とのやりとり) ・ 選択(遊び・活動の選択) ・ 振り返り(活動の振り返り)
10 月	低学団	体育　ボール遊び（全校授業研）	・ 目標への意識、意欲 ・ 遊び、活動の選択 ・ 教師や友達とのやりとりと集団参加
11 月	5 年	生活単元学習　調理 焼きそばを作ろう	・ 習慣形成(焼きそばの作り方が分かり、ほとんどの作業を一人で行う　T)(焼きそばを作るときの道具・材料の名称や使い方が分かる　M) ・ あいさつ・清潔・身だしなみ(石けんを使って手の平、甲、指の間を洗う)
12 月	低学団	遊びの指導 段ボール遊びをしよう	・ 人とのかかわり ・ 遊びの選択

表２　７月　日生、算数

協議の柱	・　相手に分かるよう発表するための手立て（場、支援、教材など） ・　繰り上がりのある足し算において、１０のまとまりをつくる手順をふんで計算するための手立て（場、支援、教材など）	
課題及び改善策	・　話す内容の偏りがある。休日の過ごし方というテーマだけでは、内容が漠然としている。ポイントが絞りにくい。	→事前にテーマを決める。
	・　相手に伝わる話し方、発表の仕方を示すべきでは。	→事前に原稿やメモ、ひな形を作り、それをもとに発表する。
	・　話の内容がいつも同じ。	→休日の様子を連絡帳で聞いておくなど保護者と連携
	・　正確に計算しようとする意欲を高めるための支援方法	→賞賛の仕方や出題方法の工夫により意欲を高める。達成感を味わうことができるようにする。（ゲーム、シールなど）

表３　８月　音楽

協議の柱	・　友達や教師と手をつなぐための支援の在り方 自分のやりたい楽器を選択するための支援の在り方	
課題及び改善策	・　手をつなぐことが苦手な児童への支援方法	→物（布、輪など）を介してつなぐ。並び方を変更する。
	・　選択しやすい環境設定	→児童一人一人の実態に合わせた選択方法をとる。（カード、実物、二者択一など）選択の時間の確保。
	・　選択の幅を広げるための支援	→人気のない楽器には小道具をつける。T が楽しそうに演奏して見せる。一度全ての楽器を演奏して見てから選択する。
	・　第１希望の楽器を選択する事ができなかった児童への支援	→楽器数の確保。回数を増やし、希望する楽器ができるようにする。

表４　９月　図画工作

協議の柱	・　自分の使いたい色や方法を選択するための支援の在り方 ・　場の設定、教材教具について	
課題及び改善策	・　選択しやすい環境作り	→その場で選択するのが困難な児童に対しては他の児童の活動の様子を見て選ぶことができるようにする。当日のビデオや写真を見て色を選択できるようにする。
	・　選択肢の数	→道具、色ともに選択肢を増やす

	・ 校外学習と図画工作の授業の結びつきを強くするための支援	→当日のビデオや写真を見ながら作る。当日の様子を表す写真などを張りつける。

表５　10 月　体育（全校授業研授業）

協議の柱	・ 低学団の児童がボールに親しむ（遊ぶ・技能の向上など）ための内容や支援について ・ より良い選択の力の獲得につながる場面（サッカーのシュートラインの選択）、設定（場・人・教材）について ・ 低学団において教師や友達（チーム）とのかかわりを身につけることにつながるチーム活動について。また、集団活動への参加を促すような内容や支援について	
課題及び改善策	・ 選択について ・ ボールが入ったことが分かるための支援、達成感を持たせるための支援 ・ リズム運動について	→3 種目（ボウリング、サッカー、的当て）の中から児童が選択できるような授業を行う。 →具体物でチームの点数を提示する。 児童一人一人にカードを配りシュートが入ったときはシールなどを張る。 ボールが入ったことが分かるよう、ゴールが光るなどの教材を用意する。 →コーンを各角３つずつ三角形に設置し、外周を走ることができるようにする。

表６　11 月　生単

協議の柱	・ 調理活動における自立的主体的に活動するための支援の在り方 ・ 場の設定、教材教具について	
課題及び改善策	・ 一人で全ての過程を行うための支援方法。 ・ 調理の途中に準備をしたり、袋を開けたりするので時間がかかる。 ・ 一人が調理している時の待ち時間が長い。 ・ 調理活動前にできる手洗いの習慣化	→写真付き手順表の作成。電気鍋のスイッチや油用の容器を変更する。 →調理活動に入る前に自分の物は自分で準備する。全ての袋を事前に空け、皿に移す（M） →児童一人で調理するグループと教師と一緒に活動するグループに分かれ、同時進行で活動する。 →絵の具や風呂用のクレヨンで汚れが落ちる様子を視覚的にとらえることができるようにする。

表７　12 月　遊びの指導

協議の柱	・　多人数集団になかなか入ることができない児童への支援の在り方 ・　遊びの幅を広げるための支援の在り方	
課題及び改善策	・　多くの人がいる場所に入ることができない児童への支援 ・　集団で遊ぶための教材 ・　遊びの幅､興味の幅が異なる集団への支援（グループ分け） ・　興味の幅が狭い児童への支援	→刺激の少ない空間を用意する。 →ゲーム性の高い遊びも用意する。 →集団が大きいので能力や、興味・目標などでグループ分けをする。 →教師がリーダーになり遊び方を示す。遊びの種類を事前に話し合ってから授業を行う。

イ　成果

・　キャリア教育の視点を略案に記入することが、児童の将来像について考えるきっかけとなった。
・　キャリア教育の視点を略案に記入することにより、授業のねらいが明確になった。
・　児童の将来像を想定したより良い授業づくりについて、小学部の現状と成果、課題を共有することができた。

ウ　課題

・　現在は略案の上部にキャリア教育の視点として、キャリアプランニングマトリックスの項目を記述している。しかし、T2 以下の職員へ意図が伝わらないことがある。
・　児童一人一人の将来像は異なるため、より具体的、個別的な記述が必要ではないか。
・　職員によって記述の仕方が異なり、統一性がないため記述しにくい。
・　略案にキャリア教育の視点を記述する際、無理な当てはめ、関連づけを行うことがある。
・　授業によってはキャリア教育の視点を限定することが難しい。（低学年の授業、包括的な授業、余暇を中心とした授業など）
・　小学部段階で、児童の卒業後を見通すことは難しい。小学部段階での将来をどの段階に設定するか検討する必要があるのではないか。
・　キャリアプランニングマトリックスは、ワークキャリアを主としているように感じる。小学部としてはライフキャリアを想定した授業も行っていきたい。

（２）小学部職員の授業力向上を促す研究会の在り方について

ア　取り組み

小学部職員の授業力向上を目指し、授業研究会において以下の 5 点に取り組んだ。

・　授業における課題を解決する場･児童の共通理解を深める場としてワークショップ型授業研究会を行った。なお、授業研究会の学年および授業名などは表１、主な検討内容は表 2～表 7 の通りである。
・　ワークショップ型研究会においては、授業者が検討を希望する事項とキャリア教育の視点にかかわる事項を協議の柱（表 2～表 7）とした。
・　授業研究会後、出された意見を集約し、共有できるよう校内ｗｅｂ上に掲載した。

・ 授業研究会で提案した授業のその後の変化、改善された点を、次回の研究会で授業者が報告した。
・ 授業研究会後、アンケートを実施し、授業研究会の持ち方および授業力向上において小学部職員の意見を集約した。

イ　成果
・ 研究会が授業提案者にとって参考になったか、自分の授業や指導へ生かしたい点があるかというアンケート項目に対し、肯定（まったくそう思う、だいたいそう思う）の回答がほぼ 100 パーセントであった。
・ 支援方法、教材について多くの改善策を小学部職員が共有することができた。
・ 授業研究会が児童の実態及び授業内容、目標、支援方法について小学部職員が共通理解する場となった。

ウ　課題
・ 授業研究会において出された意見、改善策を校内ｗｅｂ上に記載するだけでは、小学部職員全体が意識し活用するためには不十分。意見を共有し、より活用しやすくするための方法について検討が必要。
・ ワークショップにおいて意見が支援内容、教材教具に偏る傾向がある。TT の連携などの意見が少ない。

7　研究のまとめ

（1）　研究の成果

ア　キャリア教育の視点を踏まえた授業の在り方について

研究当初、小学部においては児童の将来像を想定した授業を行いにくい、小学部段階におけるキャリア教育のイメージがもちにくいという意見が多かった。しかし、キャリア教育の視点を略案に記述することにより、児童の将来像を想定するきっかけができたと言える。また、目標とキャリア教育の視点を関連つけた授業においては、授業のねらいがより明確になった。さらに、アンケートや 5 月、1 月の学部研において、小学部段階におけるキャリア教育、児童の将来像を想定した授業づくりの現状や成果、課題を小学部職員で共有した。このことにより、児童の将来像を想定した授業を行う上での小学部職員の現状と課題を把握することができた。

イ　小学部職員の授業力向上を促す研究会の在り方について

アンケート結果及び、小学部職員の聞き取りなどにより、ワークショップ型授業研究会は、小学部職員の授業力向上を促すために有効であったと言える。ワークショップ型授業研究会においては、参加した職員が積極的に話し合いに参加し、授業に関する改善策を検討することができた。授業研究会が児童の実態及び授業内容、目標、支援方法について小学部職員が共通理解する場となったと言える。

（2）　研究の課題と次年度の方向性

ア　キャリア教育の視点を踏まえた授業の在り方について

今年度は、略案の上部にキャリアプランニングマトリックスの中から、本授業におけるキャリア教育の視点について記述した。しかし、課題として記述のしづらさ、記述をする際の無理な関連づけが挙げられた。さらに、小学部段階では児童の高等

部卒業後を想定しづらいという課題も挙げられた。

そこで次年度は、始めに児童一人一人の将来像とその将来像を達成するために現在必要な事項を各担任が検討する。その上で授業づくりを行うことで、前述した課題が改善されると考える。なお、次年度は児童の将来像のとらえを、高等部卒業後に限定しない。児童によって段階は異なるが、小学部低学年は小学部高学年、小学部高学年は中学部入学を将来像の第一段階とする。このことにより、児童一人一人の将来像を想定した授業づくりがより充実すると考えられる。しかし、将来像のとらえを前述した段階にすることで、小学部から高等部卒業までの系統的な指導支援が必要となる。そこで小学部、中学部、高等部の系統性については次年度検討課題とする。

さらに、具体的で、職員間での共通理解がしやすい記述方法の統一のため、略案様式を変更する。（資料２）キャリア教育の視点に関しては、記述方法を以下のように統一する。

- キャリア教育の視点と授業の目標を関連づける。このことにより、キャリア教育の視点を、授業内容、支援方法にも関連づけることが出来る。
- 記述の際には、キャリア教育の視点と具体的な目標を記述する。また関連する支援方法、教材教具に印をつけるなどして共通理解を図る。

また、次年度はキャリアプランニングマトリックス（試案）観点解説　改訂版を用い、考えられる授業内容などを検討する。このことによりキャリアプランニングマトリックスの観点について職員の理解を深める。

イ　小学部職員の授業力向上を促す研究会の在り方について

ワークショップ型授業研究会において出された意見は、ワークショップ後に各班が発表したり、集約し校内ｗｅｂ上に記載したりし、小学部職員間での共有を図った。しかし、それらが授業提案者以外の職員にもより有効に活用されるよう、共有方法の改善を行う必要がある。

また、ワークショップ型授業研究会において出された意見に偏りがあり、TT の連携などの意見は出されなかった。そこで来年度は、ワークショップ型授業研究会に継続して取り組むとともに、出された意見、改善策の共有方法を検討し改善する。また、付箋を記入する際の主たる観点は内容、支援（場・人・物）、目標の３点であることを確認する。このことにより意見の偏りをなくすことが出来るようにする。

資料1　22年度略案様式

小学部　5年生　略案改善シート	授業名（単元名）　　生活単元学習(調理)	11月　　日　4，6校時　場所　調理室

●単元のねらい
・おにぎり作り、焼きそば作りの経験を重ねることで作り方が分かり、ほとんどの作業を一人で行う。（A）
・調理器具や材料の名称・使い方を知る。（B）
・調理の前、調理中などに石鹸を使って手のひら、甲、指の間を洗う。

●キャリア教育の視点
習慣形成（焼きそばの作り方が分かり、ほとんどの作業を一人で行う（A）
焼きそばを作る時の道具・材料の名称や使い方が分かる（B））
あいさつ清潔身だしなみ（石鹸を使って手のひら、甲、指の間を洗う）

●本時のねらい
・焼きそばの作り方が分かり、ほとんどの作業を一人で行う。（A）
・分からない時手伝ってほしい時には教師に声をかける。（A、B）
・焼きそばを作る時の道具・材料の名称や使い方を知る。（B）

授業の展開	支援	教材	評価〇△	前時からの改善点
〇エプロン・三角巾をつける。（教室） 必要な道具を持って調理室へ移動する。				
〇手を洗う。道具、材料を準備する。 Bは箸、皿、油、ざる Aは材料、計量カップ	・用意する物の名称をホワイトボードに書き、分担する。 ・迷っている時にはホワイトボードに絵を書いたり、カードを使用したりし持ってくる物が分かるようにする。	ホワイトボード、皿3枚、箸、計量カップ		
〇やきそばを調理する 一人一人調理する。 ①肉をいためる ②麺を入れる ③麺を箸でほぐす ④水を約60ml入れる ⑤蓋をして1分蒸らす ⑥ソースを入れてまぜる	・裏面の作り方を一緒に読む。 ・電気鍋を使う。 ・火力が弱いので蒸す時間を入れる。タイマーを用いる。 ・作り方を迷っている時には一緒に裏面の作り方を見る（A） ・「おいしそうだね」「良いにおいだね」などの言葉がけをし、楽しく自信をもって取り組むことができるようにする。	タイマー		
〇やきそばを食べる	・「おいしいね」「上手にできたね」など賞賛し焼きそば作りが楽しいと思えるようにする。			
〇片付け(6校時) 自分の使った食器などを洗い、乾燥機に入れる。				

資料2　23年度略案様式（案）

小学部　5年生　略案改善シート	授業名（単元名）　　生活単元学習(調理)	11月　　日　4，6校時　場所　調理室

●単元のねらい
・おにぎり作り、焼きそば作りの経験を重ねることで作り方が分かり、ほとんどの作業を一人で行う。（A）
・調理器具や材料の名称・使い方を知る。（B）
・調理の前、調理中などに石鹸を使って手のひら、甲、指の間を洗う。

●本時のねらい
・焼きそばの作り方が分かり、ほとんどの作業を一人で行う。（A）
・分からない時手伝ってほしい時には教師に声をかける。（A,B）
・焼きそばを作る時の道具・材料の名称や使い方を知る。（B）

授業の展開	キャリア教育の視点	支援	教材	評価○△	前時からの改善点
○エプロン・三角巾をつける。（教室） 必要な道具を持って調理室へ移動する。					
○手を洗う。道具、材料を準備する。 Bは箸、皿、油、ざる Aは材料、計量カップ	**→あいさつ清潔身だしなみ（石けんを付けて手の平、甲、指の間を洗う） →習慣形成（焼きそばを作るときの道具・材料の名称や使い方を知る　B）**	・用意する物の名称をホワイトボードに書き、分担する。 ・迷っている時にはホワイトボードに絵を書いたり、カードを使用したりし持ってくる物が分かるようにする。	ホワイトボード、皿3枚、箸、計量カップ		
○やきそばを調理する 一人一人調理する。 ①肉をいためる ②麺を入れる ③麺を箸でほぐす ④水を約60ml入れる ⑤蓋をして1分蒸らす ⑥ソースを入れてまぜる	**→習慣形成（焼きそばの作り方が分かり、ほとんどの作業を一人で行う　A）**	・裏面の作り方を一緒に読む。 ・電気鍋を使う。 ・火力が弱いので蒸す時間を入れる。タイマーを用いる。 ・作り方を迷っている時には一緒に裏面の作り方を見る（A） ・「おいしそうだね」「良いにおいだね」などの言葉がけをし、楽しく自信をもって取り組むことができるようにする。	タイマー		
○やきそばを食べる		・「おいしいね」「上手にできたね」など賞賛し焼きそば作りが楽しいと思えるようにする。			
○片付け(6校時) 自分の使った食器などを洗い、乾燥機に入れる。					

中学部

１　主題

「子ども一人一人の自立と社会参加を目指した授業づくり」

～キャリア教育の視点を取り入れた授業の充実を目指して～

２　研究主題設定の理由

中学部では、主体的な行動を積み重ね、他の人からの適切な援助を受けつつ、自分らしさを保ちながら地域社会で生きていくことを「自立と社会参加」と捉えている。学部の作業学習（班作業・農作業）において働く意欲や関心、態度の育成や、基本的な知識や技能の習得を目指した学習に取り組んでいる。また、生活単元学習や校外学習では、社会参加に向けて公共の交通機関の利用や地域の公共施設の利用について実践的な経験を積み重ねるなど、教育活動全体を通して将来の「自立と社会参加」に向けた学習に取り組んでいる。

近年、生徒が社会人・職業人として自立していくためには発達段階に応じて体系的・計画的にキャリア教育を推進していくことが有効だといわれている。生徒の「キャリア」を形成する支援を行うためには、教育活動全体の中で生徒が個々にふさわしい役割をもち、目標や希望を抱き、やり遂げる充実感、達成感がもてるようにする状況づくりに努めるとともに、一人一人の学習と経験の蓄積が職業生活（社会生活）に結び付く教育活動の系統性を明確にしていくことが重要とされている。

中学部では、先に述べた作業学習やその他の授業などで職業観・勤労観を育成するための指導や支援を行っているが、教育活動全体にキャリア教育の視点を取り入れることで、より一層、生徒の自立と社会参加を目指した指導の充実が図られると考えた。

そこで、本研究において学部の教育活動全体をキャリア教育の範囲と捉え、それぞれの教育活動がもつ意味を確認し、キャリア発達の視点から諸活動を関連づけて効果的なものにする。そして授業実践を行い、改善していくことが中学部における「自立と社会参加」に向けた取り組みにつながると考えた。

３　研究の目的

生徒の「自立と社会参加」に向けて、現在行われている学習活動をキャリア発達の観点から分析的に捉える。そして授業実践においてキャリア教育にかかわるねらいを明確に位置付け、生徒が主体的に学習活動に取り組めるような支援の在り方を検討し、実践を重ねることで生徒一人一人のキャリア発達を促す授業の改善・充実を目指す。

4　研究の内容と方法

（1）中学部で行われている学習活動についてキャリア発達の観点から捉え直す。

ア　「キャリアプランニングマトリックス（試案）観点解説」に基づく学習活動の捉え直しと整理

イ　「単元における観点位置付けシート」による分析

（2）「生徒が主体的に学習に取り組めるような支援の在り方」を検討し授業実践を積み重ねることで授業の改善・充実を図る。また、授業実践を行うにあたってはキャリア教育の視点で授業を捉え直すために指導案（略案）にキャリア発達の観点を記載する。

5　研究計画

月	研究内容（1年次）	月	研究内容（2年次）
4	・今年度の取り組みについて	4	・2年次の取り組みについて ・全体研究会①
5	・今年度の取り組みについて ・全体研究会①	5	
6	（1）学習活動についてキャリア発達の観点から捉え直す （2）授業実践	6	（1）キャリア発達にかかわる指導目標・指導内容の検討と整理 （2）授業実践
7	・中学部研究授業	7	
8		8	
9		9	
10		10	・研究のまとめ
11	（高教研原稿提出）	11	・研究のまとめ
12		12	・全体研究会②
1	・1年次の取り組みのまとめ	1	・研究集録作成
2	・1年次の取り組みのまとめ ・全体研究会②	2	
3		3	

6　研究実践

（1）　キャリア教育にかかわる学習活動の捉え直しと整理・分析

ア　「キャリアプランニングマトリックス（試案）観点解説」に基づいて学習活動の捉え直しと整理を行った。

キャリアプランニングマトリックス（試案）観点解説

国立特別支援教育総合研究所

人間（中高）	自己理解・他者理解

①　育てたい力

中学部　○達成感に基づく肯定的な自己理解，相手の気持ちや考え，立場の理解

・「分かった」「できた」という体験の中で自己有用感を得る。

・自分と相手の違いに気付き，異性や異年齢の人たちとともに活動する。

高等部　○職業との関係における自己理解，他者の考えや個性の尊重

・産業現場等における実習等，実際的な体験を通して，自己の能力や適性を知る。

・自分の言動が相手に及ぼす影響について知る。

・他者の考えや個性を尊重し，自分との差異を認めながらも受容する。

②　解説

中学部段階では，生徒が達成感に基づいて自信を持ち，自らを肯定的に理解する経験を積み重ねることで，自己有用感を高めるようにしたい。職業・家庭や生活単元学習，作業学習などで，達成感や成就感をもって働く活動を積み重ね，働くことに関心が持てるようにすることが大切である。家庭では，連絡ノートなどを活用することで，学校での本人の成果を共有し，努力や取組を認めることが考えられる。

また，中学部段階では，異性や年上・年下の相手を理解し，相手の気持ちや考え，また相手の立場や役割を考えることも必要である。さらに，自分の言動の影響について考える機会を設けることも大切である。

高等部段階では，達成感や成就感がもてるような体験の積み重ねが肯定的な自己理解へとつながり，肯定的に自分をとらえることが重要である。例えば，自己と他者の違いを意識し自分のことを考える授業を行ったり，産業現場等における実習（以下，現場実習とする）の日誌等を活用して自己を振り返ったり，報告会で発表する機会を設けたりすることなどが考えられる。

また，作業学習時で，仕事に必要な技能が自分に備わっているかなどの自己理解を図れるように配慮する必要がある。自分の仕事に責任がもてるようにするためには，作業結果を自ら確認できるようにすることが重要である。さらに，他の人が分担している作業内容についての理解を図り，作業結果を相互に評価できるように配慮することも重要である。

他者の考えや個性を尊重し，自分との差異を認め，時には他者から学ぶことも大切である。例えば先輩の話を聞いたり，他者と進路について話し合ったりする中で，自分の考えや価値観が明確になるようにしたい。他者を理解し，思いやりの心を持てるようするためには，様々な人たちと交流する場を設定することが大切である。

③　考えられる指導内容（例）

単元・題材名	ねらい	留意点
自分を知ろう（生単，総合：中・高）	自分の好きなこと，嫌いなことなどを確認する	好きなこと，嫌いことの他に得意なこと，苦手なこと，出来ないことなども確認する。また，友だちの良いところを見つけるように留意する。
他校との交流（生単，総合：中）	友達の良いところを認め，互いに高め合う	交流当日に向けて，自分ができることを精一杯発揮できるように準備をする，当日は友達の良いところを見つけるような場面を作るよう留意する。
男女の理解（保健体育，生単：高）	男女の違いや，互いの特性について理解しあう	違いだけに注目するのではなく，それぞれの特性を生かして協力できるように働きかける。
自分探し（生単，総合：高）	自分の得意，不得意，適性などを理解する	自分史などを作り，今までの経験や学習によってできるようになったことを振り返りながら，自分について考えることができるようにする。
作品の鑑賞（美術：中・高）	作品を見合って，良さに気づいて次に生かす	友達が工夫している点を探し，優れているところを褒め，今後の意欲や制作の参考にできるようにする。

キャリアプランニングマトリックス（試案）観点解説を参考に中学部の学習活動を整理

【人間関係形成能力】　　自己理解・他者理解

①育てたい力

○達成感に基づく肯定的な自己理解、相手の気持ちや考え、立場の理解

・「分かった」「できた」という体験の中で自己有用感を得る。

・自分と相手の違いに気付き、異性や異年齢の人たちとともに活動する。

②中学部で取り組んでいる学習

単元・題材名	ねらい
学級開き（生単）	自己紹介などを通してお互いを知る。
新入生歓迎会（生単）	中学部の一員になったという意識や、上級生としての自覚と意識をもつ。
学校間交流（生単、総合）	友達の良いところを認め、互いに高め合う。
男女の理解（保健体育）	男女の違いや、互いの特性について理解しあう。
作品の鑑賞（美術）	作品を見合って、良さに気づいて次に生かす。
自分を知ろう（生単）	自分の好きなこと、嫌いなことなどを確認する。

中学部で取り組んでいる学習活動についてキャリア発達の観点から捉え直し、整理した。

中学部で行われている学習活動をキャリア発達の観点から捉え直し､整理した表(表－１)

		中学部で取り組んでいる学習活動（※は今後取り組みが考えられる学習活動）
人間関係形成能力	自己理解・他者理解	学級開き（学級生単)、新入生歓迎会（学部生単)、学校間交流（学部生単、総合)、男女の理解（保健体育)、作品の鑑賞（美術)、自分を知ろう（学級生単）
	協力・共同	流れ作業での製作活動（作業)、サッカー・バスケット（保健体育)、文化祭取り組み（作業、学級・学部生単)、合奏・合唱（音楽)、共同製作（美術)、ボッチャ大会に向けての取り組み（学級生単)、卒業生を送る会、新聞作り・缶集め・富岡荘訪問（総合)、週番活動（特活)、親子レク
	意思表現	夏・冬休みの思い出（学級・学部生単、国語)、作業に必要な報告をする（作業)、自己紹介（学級・学部生単)、買い物学習（学級・学部生単)、感想発表（校外学習後、学校間交流等） ※電話で用件を伝える
	場に応じた言動	あいさつ（公共施設の利用、職場見学、宿泊学習）（学級・学部生単)、面接指導（学級生単)、校外作品展、作業製品販売で接客（販売活動)、身だしなみ、言葉づかい（職員室、健康診断など）（日生） ※宿泊学習での持ち物準備（学級・学部生単)、ＴＰＯに応じた服装選び（学級・学部生単）
情報活用能力	情報収集と活用	修学旅行や宿泊学習における調べ学習（学級・学年生単)、校地外学習・校外学習における調べ学習（学級・学部生単)、バス・電車の経路・運賃調べ（学級生単)、広告やチラシの情報を読み取る（数学)、買い物学習（学級・学部生単)、つばき新聞作り（総合、国語）
	社会資源の活用とマナー	図書館で本を借りる（学級生単、国語)、交通安全、公共施設の利用、交通機関の利用、遠足、鑑賞活動、療育手帳の活用（学級生単）
	金銭の使い方と管理	買い物学習（学級・学部生単)、作った物を販売しお金を受け取る（学級生単)、レストランの利用（学級生単)、宿泊学習・修学旅行でのお小遣い記帳（学年生単)、校内実習の事前事後学習（作業、学級・学部生単)、予算内で買い物をする（学級生単、数学)、バスカード・テレホンカードの利用（学級生単）
	役割の理解と働くことの意義	お遣い（学級生単)、職場見学、製品作り販売（作業)、校内実習・現場実習（事前事後を含む学習）（作業)、掃除（日生)、地域の清掃活動（総合） ※仕事調べ、ボランティア学習
将来設計能力	習慣形成	時間管理（作業)、安全・衛生・健康（作業)、基本的な生活習慣（日生)、体力（日生）
	夢や希望	職場見学（学部生単)、現場実習 ※自分の願いや希望の実現に向けて（学級生単、総合)、将来の自分に手紙を書こう（学級生単、総合）
	生きがい・やりがい	販売会を成功させよう（作業、学級生単)、カラオケ（生単)、趣味をひろげる（クラブ、学級・学部生単、総合、特活)、ボッチャ大会に向けて
	進路計画	高等部見学、職場見学（学部生単)、校地外学習（学級生単)、高等部受検に向けて（学級生単） ※卒業後の進路（学級生単、総合)、先輩を招いて話を聞こう（学部生単、総合）
意思決定能力	目標設定	高等部受検に向けて（学級生単)、販売に向けた製品作り（学級生単)、作業 ※１０年後の自分（学級生単、総合)、実習報告会を受けて、これからの自分を考える（作業）
	自己選択（決定・責任）	外食時のメニュー決定（学級生単、校外学習、買い物学習（学級・学部生単)、リクエスト給食（総合)、サーキット運動（体育)、修学旅行（学級生単)、ミュージックコンサート（音楽）
	肯定的な自己評価	実習報告会（作業)、光陵祭、運動会、校内外作品展、実習、校外学習
	自己調整	トラブルへの対処方法（学級・学部生単、総合、道徳､)、人との付き合い方（学級・学部生単、総合、道徳)、ルール、クラブ、選挙の事前学習、学部集会

イ　「単元における観点位置付けシート」による分析

「単元における観点位置付けシート（特総研）」を使用し、現在中学部で行われている学習活動と「キャリアプランニングマトリックス（試案）」の４つの領域・１６観点との関連について調査し、分析した。

（記入例）

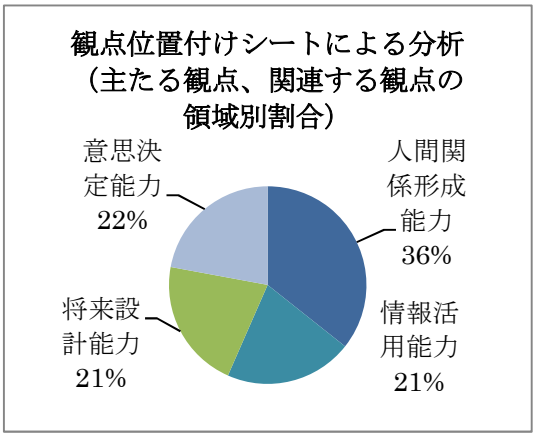
単元における観点位置付けシート　　◎は主たる観点、○は関連する観点

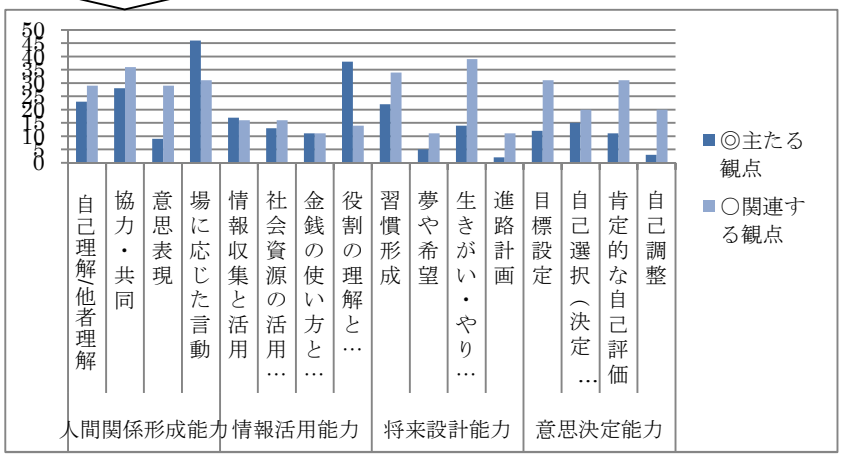
学校名	岩手県立気仙光陵支援学校		手芸班								記入者				本間			
			人間関係形成能力				情報活用能力				将来設計能力				意思決定能力			
指導形態等	題材・単元名	主なねらい	自己理解／他者理解	協力・共同	意思表現	場に応じた言動	情報収集と活用	社会資源の活用とマナー	金銭の使い方と管理	役割の理解と働くことの意義	習慣形成	夢や希望	生きがい・やりがい	進路計画	目標設定	自己選択（決定／責任）	肯定的な自己評価	自己調整
	刺し子ふきん	・特定の作業に対する基本的な技能および態度を養う ・作業を通して働くことに慣れる	○		○	◎				◎	◎		○			◎		
	織物		○		○	◎				◎	◎		○					
	染め物		○		○	◎				◎	◎							
	販売準備	作ったものが製品になり、販売することがわかる	○	○	○	◎				◎								
	校内実習	目標を立て、達成に向けて取り組む	○		○	◎				◎	◎			○	◎			
	作業日誌																◎	◎
感想（気づいたこと）		○付けをしながら、ここも○かな、これもかな…というふうに迷うことが多かった。ねらいはあっても個別の支援に目がいき、全体のねらいがぼやけていたように感じ、反省している。もっとねらいを明確にし、観点を考えていかなければならないと思う。																
集計		◎	0	0	0	5	0	0	0	5	4	0	0	0	1	1	1	1
		○	5	1	5	0	0	0	0	0	0	0	2	1	0	0	0	0

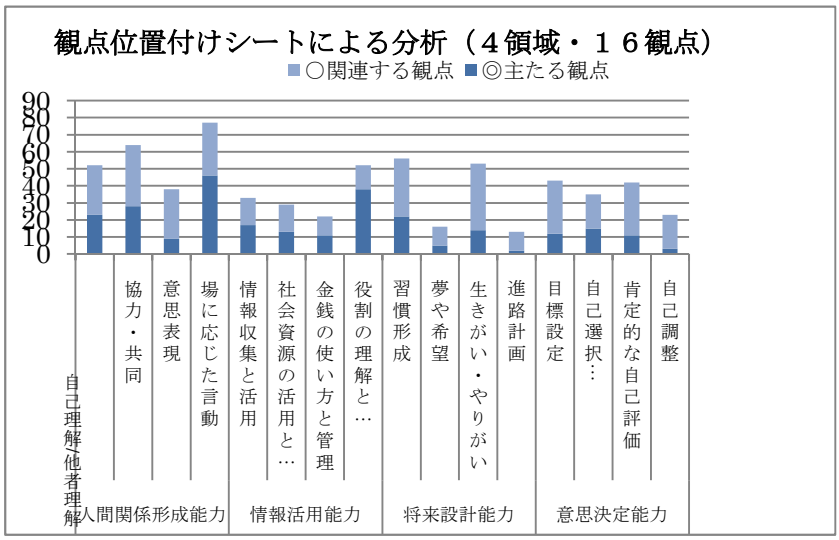
※中学部の授業（道徳を除く全ての授業）をキャリアの観点から捉え直し、各単元において主たるねらいとして取り組んでいる観点には◎、関連する観点には○を記入し集計を行った。

各教科等（道徳を除く全ての授業）の単元におけるキャリア発達に関わる主たる観点（◎）、関連する観点（○）の集計

	人間関係形成能力				情報活用能力				将来設計能力				意思決定能力			
	自己理解／他者理解	協力・共同	意思表現	場に応じた言動	情報収集と活用	社会資源の活用とマナー	金銭の使い方と管理	役割の理解と働くことの意義	習慣形成	夢や希望	生きがい・やりがい	進路計画	目標設定	自己選択（決定／責任）	肯定的な自己評価	自己調整
◎	23	28	9	46	17	13	11	38	22	5	14	2	12	15	11	3
合計	106				79				43				41			
○	29	36	29	31	16	16	11	14	34	11	39	11	31	20	31	20
合計	125				57				95				102			
◎＋○	52	64	38	77	33	29	22	52	56	16	53	13	43	35	42	23
合計	231				136				138				143			







（考察）

a　４つの領域別の割合（円グラフ）について

『人間関係形成能力』

・約４割近くある。将来、仕事に就いた時には人間関係が大切であるということが現れているのではないか。

b　４つの領域・１６観点（棒グラフ）について

①『将来設計能力』『意思決定能力』

・主たる観点としては取り組みにくい（数値が低い）が、関連する観点が多くあるという結果から授業の流れの中に含んで取り組んでいることが分かる。

②「場に応じた言動」「役割の理解と働くことの意義」

・◎が多く、どの授業でも取り組んでいる。キャリア教育の１つの柱となる中身ではないか。

③「金銭の使い方と管理」

・学級生単や作業学習ではこの観点について取り組んでいるように思われたが、主たる観点としては重点的に取り組んでいないことが分かった。実際には買い物に出かけ、レジでのやりとりを練習する活動を行ったり、修学旅行でのお小遣い帳へ記入する活動をしたりするなどの取り組みを行っている。

④「進路計画」「夢や希望」

・主たる観点、関連する観点の合計が他に比べとても少ない。中学部段階として将来をイメージしにくいのが原因か。「高等部進学」以外のイメージがわきにくい。

・関連する観点としてはあがっているが、主たる観点としての取り組みが少ない。「キャリアプランニングマトリックス観点解説」の考えられる指導内容を見ても取り組みが可能なものもある。

⑤「生きがい・やりがい」

・主たる観点としては取り組みが少ないが、関連する観点として授業の中で多く取り組んでいる。

⑥「自己調整」「肯定的な自己評価」

・主たる観点としての取り組みが少ないが、仕事をしていく上で大切なことである。我慢して頑張る、妥協する、折り合いをつける・・・など。この観点については課題があり能力育成が必要な生徒もいる。

⑦「社会資源の活用とマナー」

・昨年度は研究テーマと関連しており重点的に取り組んでいたが、今年度は美術や作業学習的な学習が多く、社会資源活用の機会が少なかった。年間を通して計画的に授業に取り入れていく必要がある。

（成果）

・「キャリアプランニングマトリックス（試案）観点解説」を参考に学部全体でキャリア発達について理解を深めることができた。

・中学部で行われている学習活動をキャリア発達にかかわる４つの領域・１６観点ごとに整理し表にまとめた（表－１）。

・「単元における観点位置付けシート」を用いて、中学部の授業（道徳を除く全ての授業）をキャリアの観点から捉え直し集計を行った。その分析から学部の学習活動とキャリア発達の各観点とのかかわりについて理解を深めることができた。

（課題）

・「単元における観点位置付けシート」の集計結果を見ると、主たる観点（◎）・関連する観点（○）の合計が少ないものは、キャリア発達の観点から捉え直した表（表－１）でも取り組みが少ないことが分かった。この点については表－１にある「今後取り組みが考えられる学習活動」の内容を参考に検討していく必要がある。

・「単元における観点位置付けシート」の記入にあたり、授業をキャリア教育の視点で見直す際に、単元がどの観点にあてはまるか迷うことが多々見られた。本校中学部生徒の発達段階や障がい特性に応じた指導目標や内容などを示す発達段階表の作成を検討する。

（２）　授業実践

授業実践では授業観察による「気づき」に注目し、授業研究会において「気づき」にかかわる柱を立て課題について検討し、改善策を次の授業に生かすことを通して授業の改善・充実を図っていくこととした。授業研究会で改善策を検討する際には「生徒が主体的に学習に取り組めるような支援の在り方」について重点をおいた。

また、授業実践を行うにあたってはキャリア教育の視点で授業を捉え直してみるために指導案（略案）にキャリア発達の観点を記載することとした。

授業改善の進め方
A　授業提案１（略案提示）
↓
B　授業観察　（付箋紙記入）
↓
C　授業研究会
↓
D　授業提案２

・略案には「キャリア教育の観点」「ねらいを達成するための手立て」を入れる。

・授業観察は実際の授業を見学する。
・授業観察の際には授業全体を通して気づいた点を成果、課題、改善策に分け付箋紙に記入する。

・授業観察の付箋紙記入で気づきが多かった点を柱とし、課題について改善策を話し合う。

・授業研究会で出された改善策を略案に入れ、再度提案する。

（略案例）

中学部　略案改善シート	授業名（単元名）　班作業（缶つぶし、缶分け）・・・A	9月29日（水）　5・6ｋ　場所：被服室

●単元のねらい
1　決められた時間内、集中して作業を行うことができる。
2　作業手順を理解し、安全に作業ができる。
3　適切な作業態度や言葉遣いを身につける。

●キャリア教育の視点
・場に応じた言動（あいさつ、報告、要求）
・協力共同（準備、片付け等）
・役割の理解と実行（自分の担当を理解し、最後まで一生懸命に取り組む）

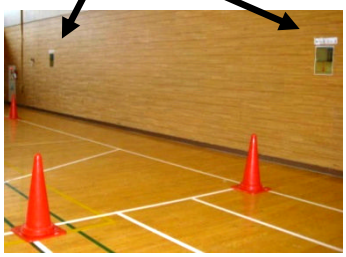
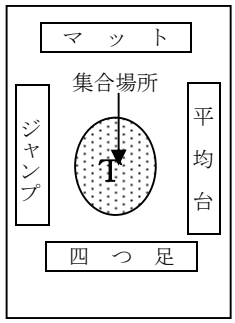
●本時のねらい
・作業内容とつぶすかごの量を理解して作業に取り組むことができる。
・カードを見て「終わりました」「〇〇を下さい」と報告や要求ができる。

●ねらいを達成するための手立て
・作業内容（缶つぶし、缶分け）と量（2かご）が分かるように写真（ボード）で示し作業の前に確認する。
・作業中に確認できる（見通しがもてる）ようにボードを缶つぶし機のそばに置く。
・終わりが分かるように、1かごつぶしたらカードをとっていき全部なくなり次第終了とする。

●ねらいを達成するための手立て
・イラスト（「終わり」「缶」「下さい」）と言葉（「缶を下さい」など）が書かれたカードを提示し報告を促す。
・繰り返し行うことで定着を図る。

学習活動（内容）	指導上の留意点	前時の授業から（授業観察者より）	具体的な改善策
1　あいさつ	・姿勢の確認。		
2　初めの会（確認） ・健康観察 ・作業の分担 ・時間配分 ・個人の目標 ・その他（服装、注意点等）	・進行はリーダーが行う。 ・個人の目標は数値化し、分かりやすいようにする。		
3　準備 ・缶つぶしの機械やつぶした缶を入れる入れ物の準備 ・缶洗い（たらいやかご等）の準備	・安全面から機械の準備に関しては基本的に教師も手伝う。生徒同士で行う場合についても気をつけるように声がけを行う。	〇声がけしないと作業を中断している生徒への対応。 ・缶を入れたかごの上に好きなキャラクターのカードを置いてはどうか。 ・缶つぶし機の横に目標の数のかごを置き、見通しをもたせる。（最初のうちは居残りしてもよい） ・タイムタイマーを使用してみる。 〇報告を自主的にするための支援 ・（声がけを受けずに）進んで報告ができるように取り組みの初めはカードを使用してはどうか。	・缶を入れたかごに好きなキャラクターのイラストを貼って提示する。 ・活動の見通しをもつために、缶つぶし機の横に目標の数のかごを置いておく。 ・活動時間を意識できるように、タイムタイマーを使用する。 ・イラスト（「終わり」「缶」「下さい」）と言葉（「缶を下さい」など）が書かれたカードを提示し報告を促す。
4　作業 ・缶つぶし ・缶分け	・缶分けについては適宜行う。 ・作業の途中に休憩（10分間）を入れる。		
5　片付け ・缶つぶしの機械や入れ物の片付け	・準備と同じ		
6　反省会 ・評価（ご褒美シール） ・先生から ・あいさつ	・進行はリーダーが行う。 ・ご褒美シールをもらうことができた理由を明確に伝える。		

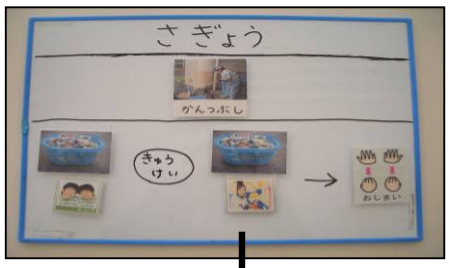
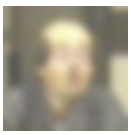
ア　実践

<table>
<tr><td colspan="4">単元名「体つくり運動」（体育）</td></tr>
<tr><td>本時のねらい</td><td colspan="3">・決まった時間サーキット運動を続けることができる。
・サーキットの内容が分かり、取り組むことができる。
・教師と一緒に道具の準備・片付けができる。</td></tr>
<tr><td>キャリア教育の視点</td><td colspan="3">・協力・共同（用具の出し入れを通し、自分の役割を理解し、仲間と協力できるようにする）
・選択（サーキット運動では選択できるコースを設定する）</td></tr>
<tr><td>B　授業観察による気づき</td><td>C　授業研究会で検討した改善策</td><td>D　授業改善</td><td>○成果
●今後の改善点</td></tr>
<tr><td>・生徒にはボードによる配置図の提示より、用具を置く位置の目印があった方がいい。</td><td>・配置場所にカードを提示する。</td><td>カード
 
・コースの名前と配置場所をカードで提示した。</td><td>○カードに示されているよう用具を配置することができた。</td></tr>
<tr><td>・用具の準備について（教師と生徒の配置）。</td><td>・生徒によって運ぶものを決める。
・用具の出し入れのときに教師側の担当も決める。
・Ｔ１は体育館全体を見渡し指示を出せるよう器具庫へは入らない。</td><td rowspan="2"> 
・教師と生徒の担当を決めた。
・Ｔ１が指名した教師のところへ集合し、座って待っているようにした。</td><td rowspan="2">○生徒がうろうろしなくなった。</td></tr>
<tr><td>・準備が終わり、うろうろしている生徒への対応。</td><td>・準備が終わった生徒は１カ所に集合する。</td></tr>
<tr><td>・サーキット運動を行う際、生徒の流れが滞る場面がある。</td><td>・サーキット運動の２カ所の種目でコースを増やす。</td><td>・ジャンプコースでは、１種目２コースから４コースへ増やした。
 </td><td>○生徒が空いているコースを選択し、滞ることがなく運動することができるようになった。</td></tr>
</table>

<table>
<tr><td colspan="4">単元名「ガーデンフェンス作り」（班作業：木工班）</td></tr>
<tr><td>本時のねらい</td><td colspan="3">・自分の作業内容を理解し、丁寧かつスピーディーに作業を行う。
・全体の流れを常に確認し、自分の担当作業が遅れていないかを確認できる場を設定する。</td></tr>
<tr><td>キャリア教育の視点</td><td colspan="3">・習慣形成（職業生活における習慣）
・役割の理解と働くことの意義</td></tr>
<tr><td>B　授業観察による気づき</td><td>C　授業研究会で検討した改善策</td><td>D　授業改善</td><td>○成果
●今後の改善点</td></tr>
<tr><td>・サンダーがけの際、木材が動いてサンダーをかけづらそうなので、補助具が必要ではないか。</td><td>・木材を挟み、動きにくくする補助具の設置を考える。</td><td>

・木材を固定する補助具を設置した。</td><td>○木材が動くことなく、サンダーをかけやすくなった。</td></tr>
<tr><td>・切断した木材の整理について。</td><td>・かごの表示の○×が下にあり見難いので、見えやすいところに表示し直す。
・切断した木材の整理が悪いので、きちんと重なるように、かごに仕切り等をつける。</td><td>

・○×の表示を見やすくした。
・仕切りをつけて整理しやすくした。</td><td>○表示が見やすく、また仕切りがあるのできちんと整理できている。</td></tr>
<tr><td>・報告が少ない。</td><td>・パーツごとなど、終了したごとに報告することを生徒と確認する。（社会では、逐一報告することは企業側にとっては煩わしいという声がある場合もあるが、教育の場であるということを再認識し実施する。）</td><td>・「できました」「確認お願いします」の報告を確認した。</td><td>○生徒が意識して報告をするようになった。</td></tr>
</table>

単元名　「缶つぶし・缶分け」（班作業：リサイクル）			
本時のねらい	・作業量を理解し、見通しをもって作業に取り組む。（缶洗い） ・作業内容とつぶすかごの量を理解して作業に取り組むことができる。		
キャリア教育の視点	・場に応じた言動（あいさつ、報告、要求） ・協力・共同（準備、片付け等） ・役割の理解と働くことの意義（自分の担当を理解し、最後まで一生懸命に取り組む）		
B　授業観察による気づき	C　授業研究会で検討した改善策	D　授業改善	○成果 ●今後の改善点
・声がけしないと作業を中断している生徒への対応。	・缶つぶし機の横に目標数のかごを置き見通しをもたせる。 ・活動に関心をもてるように、缶を入れたかごの上に好きなキャラクターのカードを置く。	 ・見通しがもてるようにボードに活動内容、量を写真で示し、１かご終わったらカードをとる。 ・かごに好きなキャラクターのカードを張った。	○ひとかご終わったら自分でカードを取ってかごに入れる動作が見られ、見通しをもって取り組む様子が見られている。 ○好きなキャラクターを見ることで関心が作業に向くことが増えた。 ●その日の調子にもよるが声がけはまだ必要である。
・缶洗い作業時の見通しについて。	・洗う缶がたらいにたくさん入っているので洗う分（１かご分）入れると見通しをもって取り組める。	 ・１かご分の缶をたらいに入れて作業し、たらいの缶がなくなったら報告をし、シールをもらう。	○どのくらい缶を洗ったら終わりか分かるようになり、見通しをもって作業できるようになった。
・ご褒美シールについて。	・ご褒美シールについて教師の主観で生徒にあげている。生徒の意欲を高めるためにあらかじめ数を設定し、目標を達成したらご褒美シールをあげるようにする。	 ・作業に入る前に目標のシールの枚数を確認し、達成したらご褒美シールがもらえることを伝え意欲づけする。	○シールの目標枚数を提示することで生徒から「あと何枚でご褒美シールがもらえる」などと話す様子が見られ意欲向上につながっている。

単元名「刺し子ふきん、織物つくり」（班作業：手芸班）			
本時のねらい	・時間に見通しを持って取り組む。 ・糸やふきんの種類を自分で選択できる。 ・シャトルを自分で通り、ヘドルを両手で引くことができる。		
キャリア教育の視点	・場に応じた言動（状況に応じたあいさつ、振る舞い） ・目標設定（目標の設定と達成への取り組み） ・自己選択（自己の個性や興味・関心に基づいたよりよい選択） ・肯定的な自己評価（活動場面で振り返りとそれを次に活かそうとする努力）		
B　授業観察による気づき	C　授業研究会で検討した改善策	D　授業改善	○成果 ●今後の改善点
・自分が使用する道具の置き場所が分からない生徒への対応。	・道具の置き場所の周りにテープを張り、分かりやすく提示する。	 ・置き場所の周りにテープを張って提示する。	○テープを意識し、自分の道具や置き場所が分かるようになった。
・織物作業で、一人でシャトルを通せない生徒への対応。	・シャトルを通す場所が分かるようにする。 ・シャトルを通しやすくする。 ↓ 補助具を用いる	 ・黒い画用紙をラミネートし、縦糸の間に差し込んだ。	・シャトルを通す場所が分かるようになった。 ・シャトルを滑り入れやすくなった。 ○結果、一人で作業を進めることができるようになった。
・織物で、ヘドルを手前に引き寄せる際、織り機が動いてしまう。	・ヘドルの力が分散しないように、机に補助具を取り付ける。	 ・机上の手前側に木材を固定した。	○織り機が固定され、力が入るようになり作業をスムーズに行うことができるようになった。
・作業内容や休憩時間の提示の仕方。	・作業内容や休憩が分かるようにカードを提示し、活動を促す。	 ・作業内容や休憩する場所のカードを指差しと併せて、提示した。	○カードの提示と指差しを併せて示すことで活動がスムーズにできるようになってきた。 ●カードでの指示理解が分かるように（指差しによる支援を減らす）支援を継続中。

イ　成果と課題

（成果）

・授業を観察し合うことで、どの授業でも「気づき」による改善点が複数挙げられた。

・複数の視点から授業観察し合うことで授業担当者側にも「気づき」が多かった。

・観察者による「気づき」をもとに改善策を授業研究会の中で検討し、次の授業に生かすことで授業の改善・充実につなげることができた。

・略案にキャリア教育の視点を記載することで、キャリア発達の観点から授業を見直すことができた。

・支援ツールの工夫や、意欲を高めるための支援の在り方の工夫など「生徒が主体的に学習に取り組めるような支援の在り方」を検討し授業の改善・充実につなげることができた。

（課題）

・授業実践において授業をキャリア教育の視点で捉え直すことはできたが、キャリア発達にかかわる指導目標を設定し重点的に取り組むまでには至らなかった。生徒一人一人のキャリア発達を促すためのねらいを明確にし、授業実践に取り組んでいくことが必要である。

7　研究のまとめ

（1）　研究の成果

中学部の教育活動全体をキャリア教育の範囲と捉え､｢キャリアプランニングマトリックスに基づく学習活動の捉え直しと整理｣｢単元における観点位置付けシートによる分析｣を行い、中学部で行われている学習活動をキャリア教育の視点から捉え直し整理することができた。

授業実践では授業観察による「気づき」をもとに研究会において「生徒が主体的に取り組めるような支援の在り方」を検討し、指導（支援）内容・指導目標・評価について工夫し実践を重ねることで授業の改善・充実を図ることができた。

また、授業実践を行うにあたって指導案（略案）にキャリア教育の視点を記載することで、キャリア発達の観点から授業を捉え直すことができた。現在行っている授業はキャリア発達の観点とのかかわりも多く、支援ツールや、意欲を高めるための支援の在り方の工夫など、生徒が主体的に学習に取り組めるような支援の在り方の工夫を継続し授業を改善・充実させていくことがキャリア発達能力の育成に結びつくことが再確認された。

（2）　今後の課題

現在中学部で行われている学習活動をキャリア教育の視点で整理することができたが、今後生徒のキャリア発達能力の育成を目指す指導・支援を行っていくためには、本校中学部の生徒の発達段階や障がい特性に応じたキャリア発達の目標や各教科・領域におけるキャリア発達能力の指導目標を検討し、指導内容と合わせて整理することで実際の指導に役立てていくことが必要と感じた。

また、授業実践において授業をキャリア教育の視点で捉え直すことはできたが、キャリア発達にかかわる指導目標を設定し重点的に取り組むまでには至らなかった。今後更に生徒一人一人のキャリア発達を促すためにねらいを明確にし、授業実践していく中で授業の改善・充実を図りたい。

高等部

1　学部研究主題

「生徒一人一人の卒業後の社会自立を目指した授業づくり」

2　研究主題設定の理由

高等部では、平成19年度から3年間、「地域で豊かに生きるための支援はどうあればよいか」の研究主題で研究を進めてきた。この研究から、生徒が卒業後、地域で豊かに生きるためには、「周囲の支援」「余暇の充実」「生活のイメージをつくること」が大切であることが確かめられた。また、生徒一人一人が卒業後、社会自立に必要な力をつけることの大切さを確認した。

高等部では、社会自立とは、「生徒一人一人が将来の姿をイメージし、自分のもっている力を十分に発揮し、社会の中で生き生きと生活すること」と捉えた。社会自立に必要な力をつけるためには、発達段階を合わせて、指導内容や指導方法の在り方を明らかにし、必要な指導や支援を積み重ねていくことが大切である。

今回の学習指導要領の改訂では、「自立と社会参加に向けた職業教育の充実」や「一人一人に応じた指導の充実」が改訂事項として挙げられた。このことに伴い、高等部ではキャリア教育の視点から教育課程の見直しを行った。その結果、「働く力」「生活する力」「余暇の充実」を３つの柱に据えて、教育課程を再編成した。このことにより、あらゆる学習場面で社会自立を目指す授業づくりを進めていくことにした。

研究に当たっては、見直し再編成された教育課程の中で、３つの柱の中心となる授業、「作業学習」「産業社会と人間」「選択教科」に視点を当て、社会自立を目指した授業の在り方、指導内容の確立、目標や手立ての検討、適切な支援の在り方について明らかにしていきたいと考え、本研究主題を設定した。

3　研究の目的

生徒一人一人の卒業後の社会自立を目指した指導内容と効果的な支援の在り方をキャリア教育の視点から探る。

4　研究内容と方法

（1）　研究内容

ア　　高等部としての生徒の実態に応じたキャリア教育の指導についての共通理解

イ　　生徒個々が必要としている力をつけるための授業づくりの充実・発展のさせ方

（2）研究方法

ア　　3 つのグループ（働く力、生活する力、余暇）に分かれ、指導内容、支援方法を工夫し、グループ相互の共通理解を図る。

イ　　授業を公開し、互いに見合うことで支援の在り方、工夫について実践を高める。

ウ　　授業提案がしやすいように支援案の様式については、略案形式で提示する。（全校研は、形式どおり）

5　研究計画

月	1年次；学部研究計画	月	2年次；学部研究計画
4	学部研究の方向性	4	2年次の学部研究計画提案
5	学部研究計画提案・社会自立の捉え・指導計画、内容精選・学習グループ設定　全体研究会①	5	全体研究会① 研究実践
6	検証のグルーピング	6	
7	略案の提示 本校高等部生徒につけたい力の確認	7	
8	キャリア教育についての共通理解	8	
9	授業検討（各Ｇごと）	9	
10	授業提案①「生活する力Ｇ」	10	
11		11	2年次のまとめ検討
12	全校研；授業提案②「働く力Ｇ」	12	全体研究会②　最終報告
1	授業提示③「余暇Ｇ」 中間報告「1年次のまとめ」検討	1	研究集録作成
2	全体研究会②	2	
3		3	

6　研究実践

今年度の実践の柱である「働く力」、「生活する力」、「余暇」について、それぞれのグループから社会自立を目指した指導内容と効果的な支援の在り方について、キャリア教育の視点から授業提案し、ワークショップ形式で成果、課題、改善点を話し合った。

（1）働く力グループ

将来の職業生活、家庭生活及び社会生活に必要な基礎的な知識、技能、態度を実践的な学習を通して身につけることをねらいとして授業を行っている作業学習を「働く力」グループと位置づけた。そこで、生徒の実態に応じた支援の在り方、生徒個々が必要としている力のつけ方、自立的、主体的に取り組む力をつけるための授業づくりの充実、発展のさせ方について検証を進めた。

ア　ねらい

①　社会生活に必要な知識・技能・態度を身につける。

②　生産の向上を図ることにより、よりよい作業を行おうとする意欲をもつとともに、参加する喜び、完成の成就感を味わうことができる。

③　すべての生徒が今もっている力を最大限に生かし、主体的に取り組むことができる。

イ　研究授業と研究協議から

①　授業提案［農耕班　（男子９名、女子２名）、指導者４名］

指導におけるキャリア教育の主たる観点

・目標設定と達成への取り組み
・職業生活に必要な習慣形成
・役割理解と協力

②　研究協議から

・個別の指導計画の中の作業学習の位置づけが入っていた。
・作業学習は働くことが学習活動の中心である。時間配分を考えた方がよい。
・製品は売れるものかどうか商品としての価値が大事である。作業分担表は、作業工程順に並べると良かった。待ちが出ないようにボードへの花付けを分けるなどの工夫を行った方がよい。
・生徒の主体性として、清掃をしっかりできる生徒を育てたい。生徒の作る喜びが溢れる作業を行ってほしい。共に働きながら、校内だけでなく地域に出て販売するなど、地域・ＪＡなどと連携を取りながら校外へ発信できるような取り組みができればよい。

③ 授業改善後の生徒の変化

・作業分担、準備物など環境整備を行った。また、作業の待ちが出ないように生生徒の動線の見直しを図った。結果、生徒が活動に見通しをもち、主体性が出てきた。
・販売会や目的を確認し、製品完成数を目標に掲げることで、作業班内で目指すものを共有することができた。
・フラワーボード作りを通して見本と同じように作ることや、袋詰めまで製品を丁寧に扱う大切さを意識できるようになったと生徒の声を聞くことができた。

ウ　成果と課題

①　生徒の実態に応じたキャリア教育の在り方についての共通理解

（成　果）

・キャリア教育の押さえを確認できた。働く力という観点でさらに発展させようという意識が高まった。

（課　題）

・働く力に関する知識、技能面だけでなく人とかかわる力、将来像を描く力、意思決定する力など、関連付けて指導していかなければならない。

② 生徒個々が必要としている力をつけるための授業づくりの充実・発展のさせ方

（成　果）

・個別の指導計画とリンクさせながら生徒個々のニーズに応じた目標、手立てを明らかにし、作業班毎に共通理解を図ることができた。

（課　題）

・製品の成果、完成を認め合う場がほしい。また、作業班同志のコラボレーションなどもすすめていきたい。
・作業班によってばらつきがある。ベクトルを再認識する必要がある。
・卒業後を見通した視点や個に応じた作業の提供が求められる。
・地域にある素材、社会資源を活用する場面がほしい。
・各作業班ごとに生徒に身に付けてほしい力の意識の統一が図られたので、さらに生活場面でも意識の定着を図っていくことが望まれる。

エ　働く力グループのまとめ

・生徒個々の課題点を明らかにし、手立てを考え、さらに働く力を発展させようと職員の意識が高まった。
・時間割が帯となり、生徒たちが活動に見通しをもち易くなった。
・作業内容の充実、生徒の意欲の高め方など確認することができた。次年度も引き続き授業改善を図るとともに、製作する喜びや製品の成果を認め合う機会をもたせること、そして、将来につながる視点で個に応じた作業を提供していくこと求められる。
・各作業班ごとに生徒につけたい力の意識の統一が図られた。今後は生活場面や寄宿舎との支援方法の絡みで職員間の意識の定着を図っていかなければならない。
・地域と連携しながら社会での役割を果たせるような活動内容も設定していくことも視野に入れていく。

◎社会自立に必要な力として、自分の役割を認識し、見通しをもって主体的に活動する力が高まった。

（２）生活する力グループ

自己の将来の生き方を探求する、将来の職業生活を営む上で必要な力を培う、自己の生き方、在り方について認識し、豊かな社会を築くための意欲や態度を育成することにより、生活する力をつけるという視点から、1 学年は「産業社会と人間」、2～３学年は、「国語・数学」を「生活する力」グループと位置づけた。そこで、生徒の実態に応じたキャリア教育の視点に立った指導についての共通理解や生徒個々が必要としている力をつけるための授業づくりの充実・発展のさせ方について検証を進めることにした。

ア　ねらい

【１学年】

①　将来の仕事や生活について考える。

②　学習や実際に経験する中で、将来に必要なスキルを身につける。

【２学年】

①　日常生活に必要な国語ついての理解を深め、活用することができる。

②　コミュニケーション能力、表現力を高めることができる。

③　日常生活に必要な数量や図形、計算などの理解を深め、活用することができる。

【３学年】

①　社会生活に必要とされる実際的な国語の理解と、適切に活用する能力と態度を育てる。

②　生活に必要な数量や計算に関する理解と実生活に活用できる能力と態度を育てる。

イ　研究授業と研究協議から

①　授業提案　１年「産業社会と人間」（男子 12 名、女子６名）指導者６名

→　高等部Ｐ１０　略案参照

キャリア教育の主たる観点

・産業現場等における実習などにおいて行った自己評価

・職業との関係における自己理解、他者の考えや個性の尊重

・進路希望の実現を目指した目標設定とその解決への取組

・働くことの意義と社会生活において果たすべき役割の実行

・必要な支援を適切に求めたり、相談したりできる意思表現

②　研究協議から

・学年ですすめることで仲間意識ができる。一人一人の意見を大事にしているのが感じられる授業であった。

・チェックシートは実習の振り返りによい。反面、自己評価できているが、個々の実態にあったものの方がよい。（3 段階程度）　→　高等部Ｐ１２　参考資料参照

・教師からのアドバイスを書けない生徒がいた。メモの時間を確保し、大切なポイントを繰り返すか、アドバイスをメモで渡し、生徒がまとめるのもよいのではないか。

・他の人を評価する学習は、他の人の様子や状態を意識することが必要である。対人関係として相手のことを考えることに繋がる。実習そのものの反省と課題をどう普段の生活に結びつけていくか今後の課題である。

③　授業改善後の生徒の変化

・生徒の発表場面設定が増え、自分が発表したり、友達の発表を聞いたりする中で、人に伝える能力が少しずつ向上してきているように感じる。

・発表に必要な情報を得る方法、大切なポイントを記入する力が身についてきている。

・現在の課題が将来の自立に向けての課題でもあるということが意識できるようになってきている。

ウ　成果と課題

①　生徒の実態に応じたキャリア教育の在り方についての共通理解

（成　果）

・キャリア教育についての意識が高まるとともに、キャリア教育について知ることができた。

・授業や普段の支援の中で「この部分は将来のこの部分につながっている」と思えることが多くなってきた。

（課　題）

・授業の中でとなると、活用しきれていない部分がある。

②　生徒個々が必要としている力をつけるための授業づくりの充実・発展のさせ方

（成　果）

・お互いの授業を見合うことで改善点を明らかにすることができた。グループで話し合い、改めて授業を見直し、共通理解がスムーズであった。

・職員間で授業の展開、支援方法を見合うことで自分自身の支援、工夫について幅を広げることができた。

エ　生活する力グループのまとめ

・生活・進路・実習を中心に据えて取り組むことができた。特にも生活するための技能を高めようとする意識を高めることができてきている。

・一斉指導とグループ指導を時間設定して行い、さらに個に応じた支援を心がける。

・進路実現、生活する力をつけていくための指導内容、進め方について深めていかなければならない。

・学年で一斉指導することにより、Ｔ－Ｔ間で連携して進めることができた。今後は、グルーピングを通して、個に応じたツールの開発に努め支援の方策を考えていく。

・地域や家庭における夢、自分の役割をイメージできるように指導内容を明確にしていく。

・高等部１年生の実習の事前事後学習では、継続してチェックシートを活用し自己の振り返りを行ってきている。有効であったことから、実態に合わせたシートの活用を対象学年に限らず、全学年が活用、共有できるようにしていったらどうか試行を図っていく。

◎社会自立に必要な力である自己理解であったり、必要な支援を適切に求め相談したりする意思表現力が高まった。

（３）余暇グループ

将来の趣味や余暇活動につなげることをねらいとした選択教科（体育、美術、家庭、音楽）を「余暇」グループと位置づけ、生徒の実態に応じて余暇を活用する力を育成するための授業づくり充実・発展のさせ方ついて検証を進めることにした。

ア　ねらい

【選択体育】

① 様々なスポーツの経験を通して、運動の楽しさや喜びを味わう。

② 健康・安全に留意する。

【選択音楽】

① 表現及び鑑賞の能力を養い、音楽活動への意欲を高める。

② 家庭生活における余暇の過ごし方を知る。

【選択家庭】

① 家庭生活に必要な基礎的な知識や技能を身につける。

② 家庭生活における余暇の過ごし方を知る。

【選択美術】

① 造形活動を楽しむ。

② 日用品の制作を通して、生活を楽しむ気持ちをもつ。

③ 作品を飾ったり、発表したりする技能を身につけ、活動に意欲をもつと共に、美術作品について関心をもつ。

イ　研究授業と研究協議から

① 授業提案　　選択美術　14 名（男子 11 名、女子 3 名）指導者 3 名

キャリア教育の視点

・職業の意義の実感と将来設計に基づいた余暇の活用

・必要な支援を適切に求めたり、相談したりすることができる意思表現力

・職業生活・社会生活に必要な事柄の情報収集と活用

② 研究協議から

・今年度からの教育課程では、選択美術を将来へつなげる目線で捉えている。クラブ活動とは違うものであり、余暇の過ごし方の幅が広がるよう、もう少し深めていきたい。また、卒業後の余暇として、休みの過ごし方にバリエーションを作れればと選択教科４領域がある。物作りの楽しさを味わえればよいのではないか。

・キャリア教育の観点（生きがい・やりがい）が多く含まれる授業であった。画材を自分で調達する方法もあるし、感覚遊びや表現法を新たに知ることにも繋がっていけばよい。

・スチールロッカーなど準備し、保管場所や準備後片付けは生徒で行う。

・完成した作品を小中学部のホールに展示したり、作品を認め合ったりする機会があればよいのではないか。

③　授業改善後の生徒の変化

・作品展が間近に迫っていることを伝えることで更に意欲が高まった生徒がいた。完成した作品を紹介し、飾ることで他生徒を褒め合ったりする姿がみられた。
・事前に職員がひも（材料）を切って準備しておくのではなく、生徒本人が好きな形、長さに切って自由に制作できるようにした所、生徒の表現力上がった。
・自由制作のテーマは、やりがいがあるせいか集中力が増したように感じた。自宅でも制作してみたいと申し出た生徒もいた。

ウ　成果と課題

①　生徒の実態に応じたキャリア教育の在り方についての共通理解

（成　果）

・難しく考える必要がないことを確認し、キャリア教育の視点や押さえについて理解することができた。
・授業を見るとき、「こういう面が育つ」など意識するようになった。

（課　題）

・日常の学習活動とどう結びつていくか、指導の視点、押さえ方について研修する必要がある。
・どの授業にもキャリア教育に結びつけるのはまだ時間が必要である。

②　生徒個々が必要としている力をつけるための授業づくりの充実・発展のさせ方

（成　果）

・時間を見つけて授業について話題にする場面が増えた。個々に合っているかどうか振り返る機会となり、具体的な手立てなど参考になった。

（課　題）

・一斉の授業の中で個々に焦点をあてるのは難しかった。
・もっとじっくりと教材研究する時間が必要である。
・生徒がやりたい内容が異なるので、どう統一した形で進めたらよいか。
・Ｔ－Ｔ間の話し合いをする時間や共通理解が不足である。もっとゆっくり話し合える時間があれば良い。

エ　余暇グループのまとめ

・余暇という観点で、知識欲や好奇心をもち、自分なりに時間を楽しむ力がついてきている。

・指導内容では、共通のテーマの中で時間を共有しお互いを認め合う姿が見られるようになってきた。

・今後は、楽しみや夢をイメージし、表現する力をつけたり、地域資源の適切な活用したりして、余暇の時間の充実の視点で考えていく。

◎自分の好きな活動を見つけ、自主的に選択して余暇を楽しむ力を高めることができた。

7　まとめ

研究主題設定理由の中でも述べているが、「一人一人が将来の姿をイメージし、自分のもっている力を十分に発揮し、主体的に地域社会の中で生き生きと生活する」ための授業づくりを研究の根底に掲げ、３グループの授業への取り組み内容を中心に進めてきた結果、今までとは違った生徒の見方、対応の仕方について新しい観点から見直しを図ることができた。

また、授業展開の在り方、教材教具の使用の仕方により生徒の授業に対する集中力、作業能力の向上等が見られた。これらのことから次年度は更に、授業づくりにおける工夫と段階的な支援のあり方について検討を重ねながら、高等部におけるキャリア教育の押さえと授業づくり、指導内容について研究を深めていくことにする。

＜資料１＞高等部　授業研「産業社会と人間」略案例

高等部１年　産業社会と人間　略案

学部・学年	高等部１年	日時・場所	平成 22 年 10 月 19 日(火)５～６校時	本時の目標	・校内実習の反省を発表することができる。 ・友達の発表、教師の話を聞くことができる。 ・校内実習を振り返って、頑張ったことや改善された点、今後の課題となる点に気づくことができる。
指導形態	高等部１年全体（男子１２名、女子６名）	指導者	Ｔ１　中村昭仁　　Ｔ２　清水美紀 Ｔ３　佐藤由樹　　Ｔ４　本舘伸太郎 Ｔ５　佐々木佳絵　Ｔ６　佐藤直美		
単元名	後期校内実習を振り返ろう!!				

時 間	生徒の活動	教師の支援と指導上の留意点	教材・教具	キャリア発達段階・内容表（試案）		前時からの改善点
				主たる観点	関連する観点	
13:15～	１　あいさつをする。 K.Ｙがあいさつをする ２　本時の学習内容を知る。	・座席は、スクリーンと黒板が見える配置とする。 ・当番を見ること、姿勢に気をつけるように促す。 ・Ｔ１は、スクリーン（パワーポイント）を使った校内実習の振りかえりや、チェックシートなどを使った反省を行うことを伝え、授業に期待感を持たせる。			・集団参加、人とのかかわり ・あいさつ、身だしなみ	
13:20～	３　スクリーンを見ながら校内実習を振り返る。 Ａ　期日、作業班、メンバーを振り返る。 Ｂ　作業内容を振り返る。	・Ｔ４がパソコン操作をする。 ・事前学習で確認したことに簡単に触れる。 ・各作業班の作業内容の発言を促す。 ・写真を見ながら、何の作業をしているところかを発表してもらう。	パソコン スクリーン 指し棒		・振り返り ・振り返り	

	C　各班の班目標と反省を発表する。	・班長に発表してもらう。 ・班の雰囲気やエピソードなどもあわせて発表してもらう。	実習日誌		・役割の実行	
	D　班長を評価する。	・評価する内容、項目等ヒントを出しながら発言を引き出す。	実習日誌		・他者理解 ・意思表現	
	E　個人目標の反省を発表する。	・実習日誌を見て、姿勢や声の大きさに留意して発表するように促す。			・自己評価 ・意思表現	
	F　実習を振り返る。 自分の変化 自分の課題 働くということ	・自分で考えることが苦手な生徒にはＴがヒントやアドバイスをしながら、プリントに書き込むように支援する。	チェックシート 実習を振り返って	・自己評価 ・自己理解 ・意思表現 ・場に応じた言動	・働くことの意義	
	G　教師の話を聞き、大事なことをメモする。	・今回の実習や今までの生活の様子を見てきて、改善したほうが良い点や課題などをわかりやすく生徒に伝える。 ・Ｔ２～６は適宜机を巡回し、記入の支援をする。			・人との係わり	
	G　今までの進路に係わる学習を振り返る。	・作業学習や実習の意義、これからの生活について、スクリーンを見ながら説明する。			・進路計画	
14:45～	6　今後の進路に係わる学習の予定を知る。 7　あいさつをする。 K.Ｙがあいさつをする	・これからも「産業社会と人間」の中で将来に向けたスキルアップのための学習をしていくことを伝える。 ・当番を見ること、姿勢に気をつけるように促す。			・進路計画 ・習慣形成 ・集団参加、人とのかかわり ・あいさつ、身だしなみ	

自分のチェックシート（後期）＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

		項　　目	実習前		実習後
生活面	1	相手の顔を見て、相手に聞こえる声であいさつや話すことができていますか。		→	
	2	ハンカチ、ちり紙は毎日持ってきていますか。		→	
	3	身だしなみ（服装、髪、爪、ひげなど）に気をつけていますか。		→	
	4	相手を不快にさせたり、傷つけるような言動をしていませんか。		→	
	5	先生や先輩に丁寧な言葉で話していますか。		→	
	6	時間を意識して行動できていますか。		→	
	7	マナーに気をつけて食事をしていますか。		→	
	8	友達が困っている時に教えてあげたり助けてあげようという気持ちを持って生活していますか。			
作業面	9	無駄話をしたりふざけたりしないで作業に取り組んでいますか。		→	
	10	作業で疲れてきた時に頑張ろうという気持ちを持つことができますか。		→	
	11	報告は、相手との適切な距離、適切な声の大きさでできていますか。		→	
	12	丁寧な作業を心掛けていますか。		→	
	13	安全に気をつけて作業に取り組んでいますか。		→	
	14	同じ作業班の人と協力しながら取り組もうとしていますか。		→	
	15	てきぱきと行動していますか。		→	
	16	わからない時や困った時に、どうしたら良いかを相手にわかりやく聞くことができますか。		→	

寄宿舎

１　主題

「児童・生徒が生活力を獲得するための支援の工夫と実践」

～インシデント・プロセス法を活用した事例研究を通して～

２　研究主題設定の理由

寄宿舎は生活の場であるという言い方がよくなされる。生活の場なのだから、設定された時間や場所においての支援ではなく、生活に即して、その場その場での支援が可能ということになる。寄宿舎という一つの建物の中、そこで生活する子どもたちに、職員集団が同じ思いのもと、情報を共有し、支援のアイディアを出し合いながら支援することができれば，そして、それを組織的な支援に結びつけていくことができれば、子どもたちが力強く生きていく力を養うことができるのではと考え、事例研究に取り組むこととした。しかし、従来の事例研究の方法は、状況報告や、ある程度の方針が打ち出されたレポートの発表に終始してしまい、具体的な支援の手立てについて，十分な討議がなされなかったり、組織（チーム）としての共通の理解が図られていない感がある。

そこで、今年度の研究では、具体的な支援方法を探り組織的な支援につなげるために効果的な事例研究会を進めていくため、インシデント・プロセス法を用いて体験学習し、実践に生かしていく。

３　研究の目的

（１）　児童・生徒への理解を深めるとともに、効果的な支援方法の在り方を探る。

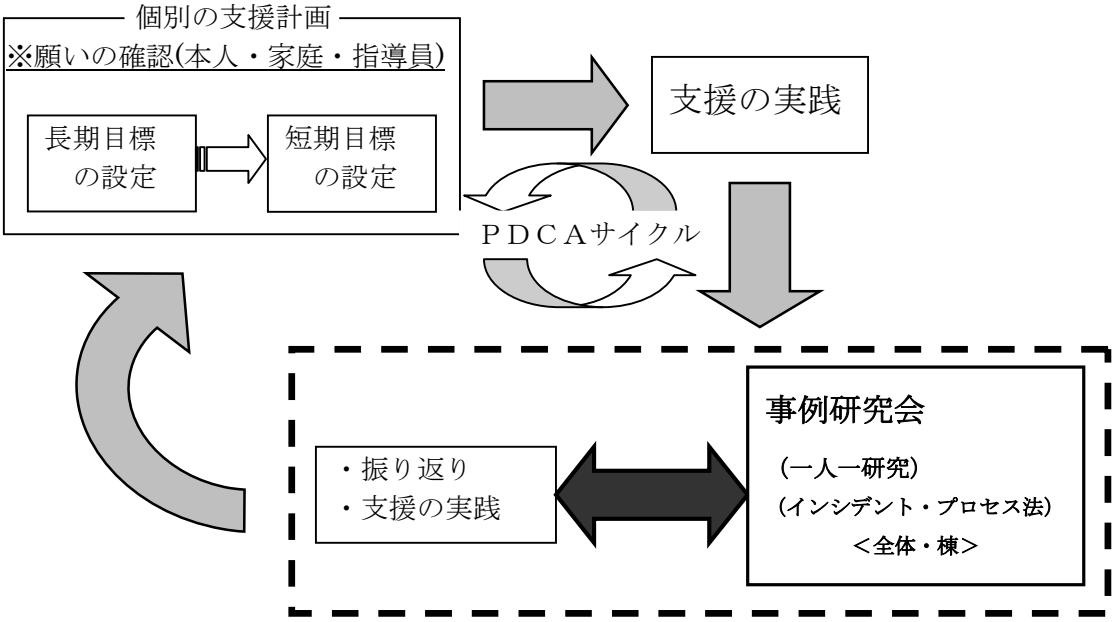
（２）　職員間の連携を深め、チームで支援する体制をつくる。

４　研究の内容と方法

（１）　個別の支援計画に基づく一人一事例研究の取り組み

（２）　インシデント・プロセス法の講義および演習

（３）　インシデント・プロセス法による事例研究の実践



5　研究計画

月	研究内容（１年次）	月	研究内容（２年次）
4		4	寄宿舎２年次研究計画の検討
5	寄宿舎研究計画の検討　全体研究会① 個別の支援計画検討会	5	全体研究会①　研究実践 個別の支援計画検討会
6	研究実践	6	
7		7	事例研究会
8	校内研修（インシデント・プロセス法）	8	
9		9	事例研究会
10	個別の支援計画検討会	10	個別の支援計画検討会
11	事例研究会	11	寄宿舎研究まとめ
12	事例研究会（インシデント・プロセス法）	12	全体研究会②
1	１年次のまとめ	1	研究集録製作
2	個別の支援計画検討会　全体研究会②	2	
3		3	研究集録（CD と HP）

6　実践

（1）　個別の支援計画に基づく一人一事例研究の取り組み

個別の支援計画に基づき、担当する児童生徒一人を取り上げ、取り組みの一つに焦点を当ててレポートをまとめた。職員の支援方法、子どもの変化、成果と課題を明確に記述し発表することで、職員側の振り返り、職員間での共通理解、発展的な支援に向けた場とすることを目的とした。

（2）　インシデント・プロセス法の講義および演習

ア　インシデント・プロセス法の講義

岩手県立総合教育センター主任研修指導主事　佐藤文円先生

イ　インシデント・プロセス法の演習

a　＜インシデント１＞　インシデント提供者（岩脇賢太）

小学部Ａ（男）

勝手に指導員室に入り、棚に置いてある折り紙を持ってくる。職員の物であるが本人は自分の物のようにしていた。断って持って行けば何も問題ない旨を話すが、なかなか聞き入れられず母に諭されても自分の物という感じで最後まで抵抗していた。

	司会者	インシデント提供者	参加者
〈ステップ1〉インシデントの提示（気づく）	インシデントの提供を一つに絞って求める。	**インシデント**	**この際に、参加者はメモをとりながらインシデントの内容を聞く。**

＜司会者＞　参加者に留意点を説明し、全員に質問を求める。

・簡潔で具体的な質問。質問の独占はしない。他の参加者と関連した質問をする。
・重複した質問はできるだけ避ける。回答中に割り込んでの質問はしない。

＜発表者＞

・事実を簡潔に回答する。質問からそれた回答はしない。推測、意見は原則言わない。推測で答える際は、根拠となる事実や理由を簡潔に説明する。今後の対応は言わない。

＜参加者＞

・インシデントの背景と思われることや解決に関係があると思われる事実を、質問を通して集める。
・インシデントの全体像を組み立てながら質問し、今後の対応は質問しない。

ステップ２へ

〈ステップ2〉

背景となっている事実の集積

（関連付け）

＜司会者＞対象児童への質問を参加者に求める。

Q.以前にも同じようなことがあったか？
　→ある。
Q.他の状況でも注意を受け入れられないことがあるか？
　→多いと思う。
Q.他の舎室から物を持ち出すことがあるか？
　→同棟の高等部の部屋から持ち出すことあり。
Q.こだわりがあり同じ物を持ち出す傾向があるか？
　→興味を示した物は自分の物のように欲しがることがある。
Q.家庭でも同じような行動はあるか？
　→家庭では聞いたことがない。
Q.なぜ折り紙を欲しがったか？
　→母と一緒に折り紙の約束をしていたようで、頭に残っていたと思う。
Q.＜司会＞問題のことへ話が移ったが、Ａのことを質問したい。
　　家族関係や兄弟とのかかわりを教えて頂けたらと思う。
　→両親、両祖母、肢体不自由の兄、本人の６人家族。兄が肢体不自由ということで家族の目が兄に向いているかもしれない。寄宿舎への泊まりも兄の関係で不定期に変わることもある。
Q.兄とのかかわりはどのような感じか？
　→体を動かす遊びはできないが、ゲームで遊び、上手にかかわっている。
Q.母に喜んでもらいたいという気持ちがあるようだが、物をとるという行動で母の関心を向けたいということはあるか？
　→折り紙の時は、母に喜んでもらいたいという気持ち、高等部の部屋に入った時は、自分の興味が先行していると思う。
＜講師＞推測で答える場合は、根拠を述べていかないと話が別の方向へ向いてしまう。
Q.もし母との折り紙の約束が叶わなかったときは、Ａはどのようになるか？
　→ダダをこねたり、噛んだり、つねったりすることがみられる。

＜司会者＞　課題になると思われることについて自由に発言してもらう。
（・発言された内容を、関連づけながら整理していく。
・基本的には、全員に発言を求める。）
＜発言者＞　参加者が発言した課題と自分が考えている課題を比較検討する。
＜書　記＞　司会者と確認しながら発言された内容を色分けしたり、線でつないだり、枠でくくったりしながら板書し、課題を幾つかに整理する。
＜参加者＞　出来事と集めた事実を総合し、自分なりの全体像をまとめながら、課題になると考えられることについて、一つに絞り自分の意見を述べる。

ステップ３へ

〈ステップ3〉 **課題の探求と整理（明確化）**	＜司会者＞課題と思われることについて確認したい。課題は何か？ ＜講　師＞重複したとしても全員に意見を求めること。
	＜参加者＞ １　言われたことを素直に受け止められないこと。 ２　我慢できないこと。 ３　断らずに折り紙を持って行くこと。 ４　自分の要求（気持ち）を伝えることができないこと。 ＜講　師＞ ・課題に関連性はないか？　→　３，４を併せて考える。

＜司会者＞　分類した課題を提示し、（課題毎に）参加者をグループ分けし、リーダーを決めて自由に課題について話し合ってもらう。
※対応策の内容とその理由を明確にしてもらう。
＜発表者＞　グループには入るが、出来事に対して実際の対応は話さない。
参加者の考えた対応と自分の実際との比較をする。
＜参加者＞　グループのリーダーを決め、対策について話し合い、グループとしての内容と理由を固め発表する。

ステップ４へ

〈ステップ4〉 **対応策の協議と発表（決定する）**	＜司会者＞ ・対応策の内容とその理由について、明確に発表をお願いします。 １　言われたことを素直に受け止められないことについて →　理解しているのにそういう行動に出てしまうのか、理解しておらずそういう行動にでてしまうのかということが大事ではないか。理解しているのに勝手に物をとるのであれば、しっかりと注意する必要がある。その際は、はっきりと～をすることは○。～をすることは×。というように提示していけば分かってくるのではないか。 ２　我慢できないことについて →　（対応策）決まり事を教える。本人の分かりやすい約束事にする。我慢できた場合には、本人の希望を叶えるなど。 （理　由）勝手に物をもっていく行動は、ルールの理解が進んでいないから。

	３　要求（気持ち）を伝えることなしに断らずに物をとること。 →　我慢できないことについての対応策、理由と同じ内容。 ＜司会者＞　ギャラリーへ意見を求める。 ＜ギャラリー＞ ・職員室の環境整備はどうか？取りやすいところに折り紙があれば取ることも簡単では。手の届かないところにあれば必然的に断らないと欲しいものが手に入らない。 ・キーとなる先生は事例提供者の先生だと思うので、もう一人の先生がある程度決まった時間に「折り紙欲しいですか？」と聞いてみる。もし欲しいと言ったら、事例提供の先生のところへ行こうというようにして、実際に教えていく。コミュニケーションの便利さや気持ち良さが分かってくるのでは。 ・ルールの再確認をしてはどうか？ルールを理解していないのではないかと思うから。 ＜司会者＞　ギャラリーの先生方にも協力して頂きありがとうございました。
＜司会者＞　今回の事例検討から何を学んだかについて問う。 ＜発表者＞　インシデントに対する実際の対応やその後の経過を踏まえて、今回の事例検討の感想を述べる。そして、参加者に対するお礼と今後の抱負を語る。 ＜参加者＞　全体を振り返り、教訓や今後の長期目標等について考え、意見を述べる。 **ステップ５へ**	
〈ステップ5〉 学んだこと のまとめ	＜司会者＞　今回の事例に対する事例提供者の実際の対応、今後の抱負についてお話願います。 ＜発表者＞　折り紙の対応については、話しても聞き入れない感じであった。母が話をしても納得できなかった様子。次の日、同じような場面があり、折り紙を持って行った後に注意したのだが伝わりきれなかった。しかし、学校から帰ってきた際に、何をしたいか、何を欲しいかをお話しすれば欲しいものを渡しますと伝えた。まだ、多少は納得できていない様子だったが、好きな色の折紙を､持っていくことができ、前日に比べると落ち着いた様子だった。 　また、職員室の入り口に「職員室に入るときは先生に断るように」という掲示を小学部の目の高さに掲示することにした。今後は、ことばだけでは伝わりきれない部分も多いので、本人の興味のあるビデオ等も用いながら、分かりやすいような視覚支援をしていきたいと思う。

ｂ　＜インシデント２＞　インシデント提供者（齊藤理絵）

中学部１年Ｂ（女）
　食事当番だったが、その日は朝から食事当番を嫌がりイライラしていた。自分が鼻をかんだティッシュを差し出し「捨ててきて」と他生徒に渡したり、ブロック遊びをしていた生徒が動かないことに腹を立て､プレイコーナーにあった木馬を蹴りこわした。その後、逃げるように食事当番に向かう。

	司会者	インシデント提供者	参加者
〈ステップ1〉インシデントの提示（気づく）	インシデントの提供を一つに絞って求める。	**インシデント** 人の嫌がることをすることについて	**この際に、参加者はメモをとりながらインシデントの内容を聞く。**
ステップ2へ			
〈ステップ2〉背景となっている事実の集積（関連付け）	＜司会者＞対象児童への質問を参加者に求める。 Q.この日食事当番を嫌がっていた理由はあるか？ →確認していない。 Q.イライラして周りの生徒に八つ当たりすることは良くあることなのか？　→よく見られる。 Q.特定の人以外にもこのような（鼻をかんだティッシュを渡す）ことはするのか？ →日常的には、言葉がなく拒否をしない特定の生徒にする傾向にある。 Q.家族構成を含め、家庭ではどうなのか？ →家族構成は両親、兄二人、妹の６人家族である。週末家に帰ったとき、妹とのかかわりで、嫌なことをするとは聞いたことがない。 Q.出来事の後食事準備に向かったようだが、それ以降は普通に生活したのか？ →食事当番は普通にこなしていた。 Q.出来事の前後に嫌なことがあっての行動か。それとも、日常的に人の嫌がることをする傾向にあるのか？ →理由もなく突発的に嫌なことをすることはない。何か嫌なことがあるか、納得がいかないときに見られる。 Q.鼻をかんだティッシュを人に捨てさせる行為が意地悪だと思ってしているのか、分からないでしているのか？ →普段の生活から考えると、嫌がらせだと思う。 Q.過去に自分が受けた経験があったのか？　→聞いていない。 Q.食事当番は自発的に行ったのか。それとも、職員の働きかけがあったのか？ →職員からの働きかけはなかった。食事当番は、本人のしたいことの一つ。ただ、自発的に行うときと、行きたがらないことがある。		
ステップ3へ			
〈ステップ3〉課題の探求と整理	＜司会者＞課題と思われることについて確認したい。課題は何か？ ＜講　師＞・基本的には参加者全員に発言を求める。 ・課題は生徒にかかわることでなくてもかまわない。 ＜参加者＞ １　職員側の対応について		

（明確化）	2　自分の気持ちを（「今日はやりたくない」「今イライラしている」）を伝えることができる。 3　相手を選んで嫌なことをする。
ステップ４へ	
〈ステップ4〉 対応策の協議と発表 （決定する）	＜司会者＞対応策の内容とその理由について明確に発表をお願いします。 1　職員側の対応について →　（対応策）学部との連絡をもっと密にとることをやってみてはどうか。 （理　由）「認めて欲しい」「受け止めて欲しい」という気持ちが強い生徒のように感じるので、「ちゃんとあなたを見ている」というメッセージを伝えるためにも、学部との引き継ぎを強化することが大切なのではないか。 2　自分の気持ちを伝えることができる。 →　（対応策）サインを見つける。パターンを見つける。 （理　由）行動のパターンを予測して対応することを続けることで、正しい表現の方法を身につけることができるのではないか。サインに気づき、代弁してあげる。本人の動きを期待してしまうが、その前に声をかける。 3　相手を選んで嫌なことをする。 →　（対応策）スキンシップの時間を多くとる。 （理　由）根本的な心の安定を図ることが大切だと考える。 ＜司会者＞　ギャラリーへ意見を求める。 ＜ギャラリー＞ ・人に迷惑がかからない程度の気分転換やリラックスの方法を身につけるため、こちらからの情報提示があっても良いのでは。 ・まずは気持ちに共感してあげる。会話を楽しむ生徒のようだが、こちらからの話しかけに答えることは難しいので、予測して代弁してあげる。 ・イライラした気持ちを自分で解決するのは大人でも難しいこと。対応策は「声をかける」ということ。その理由としてはイライラした状態がいつもと違う自分の気持ちに気づかせてやることが大切だと考えるから。もう一つは、「誉める」こと。
ステップ５へ	
〈ステップ5〉 学んだことのまとめ	＜司会者＞　今回の事例に対する事例提供者の実際の対応、今後の抱負をお話願います。 ＜発表者＞　沢山のアイディア、自分とは異なる視点からの意見を聞くことができ、大変参考になった。この日私が職員としてどのように接したかというと、食事当番に行ったＢさんを追いかけて食堂へ行き、普通に食事当番をしていた彼女を入口に呼び、人の嫌がることをする人は、当番活動をしなくても良いと友達に対しての態度を叱った。しかし、今日の話の中で、なぜ食事当番

	が嫌だったのかについて、全く聞いていなかったことに気づいた。そして、「誉めて欲しい」という気持ちに気づいてやれなかったことを反省している。学校から下校してきた後、寄宿舎の日課に追われて、Ｂさんがやりたがっていたブランコの時間もとれないでいた。話を聞いてあげる時間をとろうという努力が足りなかったと感じている。 　今回、改めて彼女が社会に出て愛される人間になって欲しいと感じたし、これからＢさんがリラックスして過ごせる環境作りについても、配慮していきたいと考える。今日はありがとうございました。

Ｃ　インシデント・プロセス法による事例研究の実践

＜インシデント３＞インシデント提供者（山口　祥）

高等部３年Ｃ（男）
　同室の生徒のものを隠したり、ゴミ箱に捨てたりする行動が気になっている。後で注意をした際には、すでにそのことを覚えていない。

	司会者	インシデント提供者	参加者
＜ステップ1＞インシデントの提示（気づく）	インシデントの提供を一つに絞って求める。	**インシデント** 同室の生徒に対するいたずらについて	**この際に、参加者はメモをとりながらインシデントの内容を聞く。**
＜ステップ2＞背景となっている事実の集積（関連付け）	＜司会者＞対象児童への質問を参加者に求める。 Q. 特定の物や決まった時間はあるか？ 　→時間は夜。舎室に一人しかいない時間。物に関しては、目にとまる物。押し入れの中にある物。 Q. 家族構成、家族関係は？ 　→両親、弟２人、妹。 Q. 家での生活の様子？ 　→土日は、近くの祖父宅で過ごすことが多い。 Q. 他室へ行くことはあるのか？　→ない。 Q. 物がなくなったことに気がつく人は誰か？ 　→同室の生徒。すぐ職員に報告に来る。 Q. 困るのは誰か？ 　→困るというより、またかという反応が多い。 Q. 自分の物がなくなったときは？ 　→自分の物を隠されると怒る。 Q. 友達といっしょに行動することはあるか？ 　→単独行動が多い。		

	Q. そのときの職員の対応は？ →よいこカレンダーをつくって欲しいという申し出があったので、用意した。 Q. 舎室での過ごし方は？ →生協のチラシを見て過ごすことが多い。
〈ステップ3〉課題の探求と整理（明確化）	＜司会者＞課題と思われることについて確認したい。課題は何か？
	＜参加者＞ 1　同じこと（物を隠す）を繰り返すこと。 2　人とのかかわりが希薄である。 3　余暇の過ごし方。
〈ステップ4〉対応策の協議と発表（決定する）	＜司会者＞対応策の内容とその理由について明確に発表をお願いします。 1　同じこと（物を隠す）を繰り返すこと。 →　（対応策）・物理的に隠す場所をなくす。 ・職員が１対１の時間を持つ。 （理　由）「振り向いて欲しい」という気持ちから来る行動のように思われるので。 →　（対応策）職員は反応しない。 （理　由）正しいかかわり方でないことを態度で示す。 2　人との関わりが希薄である。 →　（対応策）・家族に対してＣとの時間をもってくれるよう啓蒙。 ・物（漫画・ビデオ）を利用して友達の関わる時間を持つ。 （理　由）・家庭の中での居場所を確保する。 ・物を介して人とかかわりをもとうとしているので逆に物を利用してかかわる時間をもつ。一人の時間を減らす。 3　余暇の過ごし方。 →　（対応策）職員からの情報提供を多くする。 （理　由）本人は見つけることが難しい。 →　（対応策）日課に友達と関わる時間を組み入れる。 （理　由）日課通りの生活を好んでいるようなので。
〈ステップ5〉学んだことのまとめ	＜司会者＞　今回の事例に対する事例提供者の実際の対応、今後の抱負をお話願います。 ＜発表者＞　自分の対応としては、賞罰（よいこカレンダー）ではあったが、何かのメッセージだとは感じていた。自分なりに時間をとっていたつもりだが、家族へ対しての働きかけとか、余暇の充実といった意見は大変参考になった。チラシを見て過ごすことも、彼の生き方だと受け入れていたが、知らないからという面もあったかもしれないので、情報提供をしていきたいと思った。参考になる意見ありがとうございました。

7　研究のまとめ

（1）　研究の成果

今年度、「子どもたちが生活力を獲得するための支援の工夫と実践」のテーマのもと、効果的な事例研究会の在り方を探ってきた。研究の内容で、あえて従来の事例研究会を設定したのは、インシデント・プロセス法を用いた事例研究会との比較を試みたかったためである。結果を以下のようにまとめる。

ア　個別の支援計画に基づく一人一事例研究会

◎個別の支援計画を掘り下げて文章化することにより、自身の取り組みを振り返ることができる。

◎職員間の共通理解を図ることができる。

・資料作成に時間と労力がかかる。

・事例提示に時間がかかり，協議時間が不足しやすい。

・話し合いの場が共通理解を図るに留まり，具体的な支援の方策を見出すまでに至っていない。

・指導上の話題が担当批判につながることを恐れ意見が出にくい。

イ　インシデント・プロセス法を用いた事例研究会

◎資料作成に時間をとられることがない。

◎否定的な内容ではなく、具体的な支援方法やアドバイスを出し合うことができる。

◎参加者全員が主体的に話し合いに参加することができる。

◎安心して，誰もが発言できる雰囲気をつくることができる。

◎時間設定や、進行上のルールがあり、焦点を絞った話し合いができる。

以上のようなことが、文献等の知識としてではなく、演習による実体験から理解できたことは成果であった。しかし、当然のことながら、本研究においては、効果的な事例研究が目的ではなく、事例研究により、児童生徒により良い支援が還元されることを目的としている。インシデント・プロセス法の演習後の職員アンケートには「インシデント・プロセス法を用いた事例研究会の後、インシデント提供者がどのような支援方法をとったか。どのように変化が見られたかの検証があってもよいのでは」というものがあった。様々な事例研究の手法がある中、「支援について語り合う」ことに着目しインシデント・プロセス法を学んだが、インシデント・プロセス法もまた、万能ではなく、時と場合によって使い分けていくことが必要だと分かったことも一つの成果である。

（2）今後の課題

事例研究の一つの手法としてインシデント・プロセス法を学び、インシデント（出来事）を出発点として、ルールに従って、参加者が平等な立場で事例検討していくプロセスを大切にすることで､支援について気軽に話し合える雰囲気がつくられることを実感した。そのことは、事例提供者にとっても参加者にとっても「気づき」をもたらし、今後の支援の参考とすることができた。しかし、成果の中でも触れたように、その後の検証（振り返り）はどうすればよいかとの課題も残されている。もう一点、従来型の資料やデータをそろえての事例研究は、時間に制限がある中、話合いが深まらないなどのマイナス面が強調される反面、資料をまとめていく過程で、自分自身の振り返りになったり、職員全員での共通理解を図る上では、効果的だとの声も上げら

れた。

そこで、今後の課題として、

① インシデント・プロセス法を日常的に活用していく。

② インシデント・プロセス法を活用した事例については、インシデント・プロセス法の良さをいかし、簡単な振り返りを行う。

③ 従来の事例研究会も平行して行い使い分けていく。

等に主眼を置き、取り組んでいきたい。

全校研究

１　研究実践

（１）キャリア教育の視点を授業（指導や支援）に生かす取り組み

ア　全校授業研究会

各学部１回ずつ取り組んだ（詳細は各学部研究を参照）。

イ　学部研究

a　小学部

児童の豊かで幸せな将来像を想定した授業内容・目標・支援方法を設定するために、キャリア教育の視点で授業を捉え直した。また、ワークショップ型授業研究会を通して、職員の授業力向上や児童の実態の共通理解をすることができた。

b　中学部

生徒の「自立と社会参加」を目指し、教育活動全体を「キャリアプランニングマトリックスに基づく学習活動の捉え直しと整理」「単元における観点位置付けシートによる分析」によって整理した。また、「気づき」をもとにした授業研究を行い、授業にキャリア教育の視点を取り入れた改善・充実を図ることができた。

c　高等部

生徒の社会自立を目指し、キャリア教育の視点で授業づくりを検討することで、生徒の見方、対応の仕方、授業展開の在り方、教材教具の使用の仕方が変わり、生徒の成長を促すことができた。

d　寄宿舎

児童生徒が生活力を獲得するための支援を検討するため、事例研究をインシデントプロセス法を用いたものと、従来通りの個別の支援計画をもとにしたものを行い、比較検討した。

ウ　教育センター要請研修（キャリア教育・インシデントプロセス法)、各講演会など

（２）効果的な授業・事例研究会（ワークショップ型授業研究会、インシデントプロセス法）を目指す取り組み

ア　ワークショップ型授業研究会の実践

３回の全校授業研究会の実践と、事後に授業者と参加者にアンケートを実施して、効果的な研究会を検討した。

課題→改善点

・協議時間の確保→グループ発表数を約半分（６グループ）にするとともに、２分経過後にベルで知らせた。

・協議内容の総括がほしい→研究会の最後に、キャリア教育の観点が授業にどのように反映されていたか、または反映（改善）していくべきかについて、目標・内容・支援を柱に総括した。

・協議の柱が不明確→研究会の前に、授業者と進行担当の研究部が相談し、協議の柱を決定した。柱については、授業者が研究会で意見を求めたいことを中心に、キャリア教育の視点を取り入れた具体的なものとした。

イ　インシデントプロセス法による事例検討会（寄宿舎）の実践

資料作成の時間が不要、肯定的・主体的な話し合いができる、焦点が明確になるなどの成果があった。課題としては、その後の指導（支援）の検証不足、自分の指導を振り返ることのできる個別の支援計画の作成・協議との使い分けが挙げられた。

Ⅶ　研究のまとめ

１　成果と課題

（１）　キャリア教育の視点を授業（指導や支援）に生かす取り組み

ア　成果

- キャリア教育への意識を高めることができた（全校・学部研、センター要請研修、各講演会など）。
- 授業（指導）をつくるときに、児童生徒の将来を見据えて取り組むようになってきている。
- 略案の様式の中に、キャリア教育の観点を明記することを確認したことで、授業の目標や内容、支援が明確になりつつある。
- キャリア教育の視点を取り入れた授業を目指す中で、児童生徒の実態や目標の共通理解につながった。

イ　課題

- 小中高それぞれの「将来」をどこに（例；何年後）設定したらよいかのとらえが曖昧であった（小低は小高、小高は中、中は高、高は卒業後が妥当か）。
- 小中高の系統性をもたせるための取り組みが不足している。
- 「キャリア教育の視点で授業を点検する」とはどういうことかの検証が不足（全校授業研については、目標・内容・支援の柱で点検）している。
- キャリアプランニング・マトリックス（試案）の使用の仕方や理解のされ方について、職員間でばらつきがある。
- 個別の指導計画・個別の教育支援計画（学部）、個別の支援計画（舎）などとの関連について検討が必要である。
- キャリア教育の視点に可能な限り特化した授業内容の検討が必要である。
- ワークキャリアとライフキャリアのバランスの検討ができなかった。

（２）　効果的な授業・事例研究会（ワークショップ型・インシデントプロセス法）を目指す取り組み

ア　成果

- 授業は改善していくものであるという意識が定着してきている。
- 授業提案者にとって、必要な意見を多数得ることができた。
- 活発に意見を出しやすい雰囲気の中で研究会に取り組むことができた。これは、キャリア教育の視点を取り入れた授業改善を目指す時に、最も重要なことであった。
- 研究会を通して、参加者各自の指導へ生かす視点も得ることができた。

イ　課題

・ 研究会後の授業（指導）が、どのように変化（改善）していったかの検証が不足している。
・ 他の個別の指導計画・個別の教育支援計画（学部）、個別の支援計画（舎）をもとにした、実態や目標、指導・支援の共通理解を目的としたものとの使い分けや関連が不明確であった。

2　次年度の方向性

・ キャリア教育の視点を取り入れた授業改善をする中で、子どもがどう成長（変化）していったかを中心に取り組んでいく。
・ キャリア教育について研修を継続するなかで、キャリアプランニングマトリックスの観点解説などについても共通理解できるよう取り組んでいく。
・ キャリア教育について、全校の系統性をもたせるために、系統させるのは指導内容なのか、児童生徒の目標なのかということも含めて検討していく。
・ 個別の指導計画や個別の教育支援計画、個別の支援計画などとの関連、キャリア教育に特化した授業内容の検討、ワークキャリアとライフキャリアのバランスの検討については、全校研や学部研で検討や実践を行う。
・ ワークシップ型授業研究会、インシデントプロセス法を用いた事例研究会については、目的（意見を出しやすい・改善についての意見がたくさん集まるなど）を周知しながら、より良い取り組み方を検討していく。
・ 研究会後の授業がどのように改善したかを検証するため、全校授業研究会で取り組んだものについては、再度学部授業研究会で検討する。